りてみな一もとの學者になるへきものなるへし聖人一代ゑ樂を定め給ひてよき正音のものゝ雅にして淫聲ならぬものにて樂しむことを敎置給ふ故に人夫をたのしみて淫聲にならすしてすむ也ならのことき猿樂と雅樂とありて身分のものは決して三弦なとひくものなきを以江戸の御籏本の歴々といふもいやしき乞食非人のする聲音絲竹をたのしむの多きをみるへし人のたのしむこと或は道ひくこと先ッ定りあれはよきことをたのしむ也夫かなけれはよからぬことをする也不二孝のことを歎してこのことを記す也

○廿二日　晴　昨夜内藤杢左衞門撿見序ゑ由にて來る久々にて江戸咄なといたし酒肴めし等差出候ゑ夜五ッ時頃まて對話いたし候杢左衞門は三好庠助と申候ゑ南御徒町の御徒にて霞舟先生の弟子にて左傳をよみわれも行たり其後互に轉變して小普請奉行御普請奉行ゑ節とも世話いたし遣し又此度わか支配國へ來りて申談等いたすめつらしき事也左傳をよみ候節は我十六才也といひき左もあるへし

○廿三日　晴又雨　此ほと追々にもみちよし庭なと芝生まて紅にうつる也春日山のもみち其外共によろし

○廿四日　晴　きのふ育介來りて書經堯典曆法の論をしたるによりて昨夜中欽定四經大全なとをよみて今朝其論をしるして遣したり其序に孫子國字解の徠翁の說をみて孫子をみるにいろ〳〵のことをわれ書入をし置たりわか子孫にもこの書入をみて直してくるゝ人ありたき事也上にて親の書入也とて持居り下にて書入もしらす賣て仕舞也かなしきこと也この日記のことき也又しかり子孫のうちに一度を目を通すへきものありやなしや○昔高田屋嘉兵衞は魯西亞ゑ島國（カムサスカ）へ行彼國の役人と對話して日本の境等を定め蝦夷の千島のなみを治めたりわれ夫に付おもふは我壹人を紅夷の船へ乘被遣て英夷其外ゑ西洋各國をめくり來りたしかなることをしり得て歸り來り御國の御爲をなしたき事也　大猷院樣御代には七

年西洋へ隱密を遣されたり此こと二度迄あり又間宮林藏も其ことを加賀守殿に願ひて御勘定奉行より進達したり人世百年のものなし千年の墓なしかゝることにていのちをすつるは少もいとはぬ也嘆息してこれを記す

○廿五日　晴　御用狀來る○母上樣倍御機嫌克其外々御無事目出度候○太郎々清書來るこれも又新右衞門々世話とみゆ太郎の清書を遠國にてみるは一喜一哀也太郎わかまゝにてつけあかり甚しと聞く是は申候迄も無之孫の三百下りの十倍ひこの三貫下りなるへきかされ共密におもふは敬次郎は母の手もとにありなから左もなき樣子この頃も申遣したる通也しかるに太郎右々次第井上にて一同打よりて過愛甚敷によるなるへし忝とも何とも可申樣はなし酒を買ひて尻を切らるゝ譬のことくなれ共何卒新右衞門夫婦嚴敷して屢土藏なとへ入られ候樣にと其ことを申也母上へ申上候ゑも御取用いかゝあるへきやと此ことをしるす也

○廿六日　くもり　大に暖氣也此ほと稻刈になりたるに大にとりみ減したるといふ也大坂は米をあけたるなと云也

○廿七日　雨　御用日白洲に出る○藤左衞門々行書此節はいかに一覽いたし度候御序に一枚御越可被下候○新右衞門日記々内脇坂にて月見々かけ物の樣子月をみるに當時の立野（龍カ）候は先代中書公より文雅は大にまされるかことし先代は豪傑は上もなき人なりしか文雅なることは少かりき乍去東江風の草書一變したる老筆の書狀なとは又世にたくひすくなきまてにめてたくかゝれし也

○廿八日　雨　きのふは與力共々内御取締懸二人是は組頭のことし酒をのませてちりめむ羽織壹ツツゝ遣したり與力二人々内筆頭は殊々外作法正敷めつらしき位也能二番もみる内に刀のつかより外へ目を動かすといふことなし書をよくし少々文字ありて禪學をする也○此ほと大坂にて開板する積々大和誌の作者也二筆は豪氣ありて正直にて御用向をわか家のことくする男也五十六にて毎朝劔術なと遣ふ也砲術劔術馬術其外御用向

共此二筆みな引受也才智は筆頭ありあれは又一失あり智といふものはいやなる所あるもの也袴を脱たるをみしものなしといふ位也酒のみても少も不變二筆は酒のむとわか家にて子供相手に酒のむかことき さまする也人はいろ〳〵のもの也され共二筆のかた御用向に氣遣ひなし筆頭は御役人ならはしくじらすして身上よき人二筆は必しくしりて身上わるき人也上たるもの其身の行跡の修行に人を遣ふへき事也

○廿九日　曇　立田の神主の欠込訴寺社奉行衆ゟ來る其内不如法其外之義もあれは風聞糺に出すさて其書面に與力玉井金七郎は一番の口きゝとあり此男は與力末より二人メにて組一番の口をきかぬ男也其上に右之一件は四五年もかゝり居たる一件にてわか初しらす一吟味にて濟口になりたる一件也夫は奉行所之正德之書物に双方連印之證據分明にて一言もなく負たる也夫ゟうらみていろ〳〵のことをいふとみえたり風聞糺を欠込訴人之行跡をもたゝせさてかく不法なることを江戸へ申たれはとて決して憎みて風聞たゝしすへからすとわけて申付てやりたり

○晦日　雨　岡本近江守よりおさと兼ゟたのみ置たる手本來る近江守も八十三と申老年故に手顫（フルヘ）て眞はかけすとて行草にてよみうた紀行詩作なと書て越したりわれへもいろ〳〵書て贈りたり近江守は三韓人の恐たる詩人にて清朝より岡本の詩の和韻をして越たるといふ位の人なるに氣之毒なれともわれより返禮の排律の長篇一首と清書一枚おさとよりは奉書へ百くたり余の消息文をかきて墨なと添へて遣したり

○十月朔日　曇　月並の禮受ること例の如し○とし月のいるかことくに立はしらすことしも九十日はなし江戸歸るか夫たけ近しと喜も可笑こと也○廿九日は夕かたより晴て過暖けしからぬことにて春社清明の頃のことく庭のもみちいふはかりなし八半頃よりおさとゝともにうたよまむ庭のもみちのもとへ行すやといひけれはおさとみつから莚なと持行春日山

のもみちをみる所の山にしきて矢立かみなともち行て二人して頻にうたよみたりさすかに夕かたになりければさむしおさとの計ひにて庭の柚の實を二ッ三ッとりてそれをさかなにしてしはし酒のみて又うたよみたり御兩親樣にも被爲入候へと申上たるに母上はさむしとて御斷也父上御出也日のくるゝまて庭に居たりならのもみちは緋ちりめむのことし燃立かことしかすか山の紅葉臺といふ所の紅葉黄葉うちましりたるけしき中々筆につくしかたし

○二日　曇　世々の奉行之用人給人へ下掃除之方にて出來秋に一度もちを振舞こと也いまた行さりけれはこの秋はもち米もよく出來たり是非といふ故に用人給人共は斷て家内と子供とを遣したり江戸最寄掃除のことく亭主も子供も來りて糞を荷ひ行ことなれは其氣にて行たるに立派なるうちにて土藏の大成か三ケ所もある故にいさゝか驚たり掃除夫婦のもの門前ゟ出迎て坐敷へ通したるに用人給人の妻子の通る上之間にはみな毛氈を敷て其上に唐さらさの坐ふとむをこと〳〵くに敷まうけて金屏風なと立てありこゝにいたり筆頭の民藏のかみ大におとろきていさゝか足の置所手の所置をしらすやかてあづきもちを出したるに菓子盆なと眼を驚すはかり也もとより赤小豆もちきりの心得故に子供迄夥食したるに夫ゟ段々いろ〳〵のもの出てみること食ふことみな新奇にて内心驚歎せすといふことなし畢にうす茶出たりこゝにいたりて面色赤小豆のことくになりて服紗さはきに困窮して民藏妻其外讓合ふこと屢也古人云窮スレハ必通すと困窮より一奇計を思ひ出て傳へきく茶の湯といふものは茶碗をとりて一口のみて次へ廻すこと也といさなすへしとて一口のみ次へまはしたるに又そめか前へも茶碗を出したり是はと驚ケは段々と茶碗出て濃茶にはあらすうす茶也けりと也掃除夫婦はかりにゟ目八分に配膳して其儀尤巍々たること也と也われ察するに膝栗毛三四篇の躰をみなかねたることなるへしおさとなときくことに笑にたへすして腹をかゝゆる事也

このことみな恐多も東照カ□□宮の御武德上のいカ御威光□□は公儀の御恩の余りいカ也容易に□ふへからす

○三日　晴　めくらあんまあり夫か娘の四才になるをつれ來れりみれは空いろのふり袖にて模樣もの也江戸ならはさんとめ位やう〳〵のことなれと上かたはみなかく風俗のこと也木綿の模樣ものきることは田舍には多けれと江戸には少きこと也この二日三日の躰にては上かたよき樣なれと金氣はなし奉行ゐ仕來にて大名より貳朱の目ろくをくるゝことあり與力同心なと小玉銀なるもありと也江戸の難有ことおもふへし

○四日　時雨　きのふ川柳をきゝて感服したり其句は

鏡見て親父のへのこうらみけり

と也これはわかき人の朝に起て齒を磨くかはしめにて浴み梳りこゝろをつくして後かゝみに向ひみれとも容貌の醜惡なるを歎きて親をうらみたるもの也わかき人のこゝろ惡へきにはあらぬ也われ今天下の人の心はさら也諸藝にいたりて親をうらむるにいたりて成就なれ共親うらむるにいたる人をみすみな親より賜はりしよりわるくして親のかたよりみな子をうらむ也筆算學問弓馬鑓刀其外のことにいたりて鏡に向て此上は人力の及はぬといふ其極にいたるもの世のなかにありとしもおもはすみな天より賜はりたる半分もつくさぬ也わか庭にきくありならのうちにてよき菊のたねをもらひて家來のつくりたり去年はか成也ことしはつくらされは十種ゑ内八ッ迄は黄に變してはつかにかたはかりを存せり世の人の藝われらかすることみなこの菊のことし誰かは親のへのこをうらむるにいたるへき

○五日　晴　市三郎しめ治をとりに出たりしめしにけしからぬ大成もあるもの也さしわたし六寸より七寸なるかある也其味いふへからす松蕈のかほりはあらねと汁なとにするに魚類より甘美也

○六日　晴　此ほとおさとけろ〳〵久々不起それは近頃勘考して自分と躰の筋をもむ也輕く起るきさしの節は夫にて直る也尤日々夜々しはしの間も筋をみつからもまぬことなし先代齋藤嘉兵衛か珠數のことしこの頃

はみつから得たる所ありて足のこの筋もめはよく通するこの筋はこゝへ通ふなといふこと十四經をみなから說かことし不思義なること也はしめわか筋の論をするを笑ひしか近頃は遙にわれに過たり

○七日　晴　京都より寶藏院之後見歸り來てのはなしに齋藤彌九郎之悴京都へ弟子二人召連來りて所々にて稽古をしたるに以前園野源太郎は五十に近き人故柔に遣ひたる故に名人也とて感したるにこのたひは廿二歳の若もの故にけしからす働てしなひへかけて人を投或は强く打られて勿論少も不當よつて神か鬼かのことくに人々いふといふ風聞を聞來れり

○八日　晴　おさとのけろ〳〵起らさることを稱したるに又起りたり例之通也この女けろ〳〵奇病也更に起らぬこと二年あらは必外に以之外の病を生すへし胎內妙合の時よりある病なるへし夫故に藥もきかす死するかとおもふはかりに煩ひても卽坐に平癒してつかれす一滴の藥を用ひすして直るといふにてもおもふへし

○九日　晴　此ほとさむさに向ひて例の通我こゝろよし常のことなから霜ふり井よりけふり立ことになると健也例之通六時頃より起て鑓劔のすこき其外をする也けふ試に樫の大棒にゐ一かたに千三百はかりすふりをしてみたるに少もくたひれすこれにてはよろしかるへし乍去常には母上の御沙汰もあれはかくはせぬ也息合其外力以前に少もかはらす氣根は少々よくなりたるかことし只こまるは年々寐られぬ也このほとつとめて四過に仕舞一合の酒をのみ臥りていかにしても八半位に目さめ夫よりいかにしても寐られす寐らるゝ時は必病ありこれには實にこまる也無事の御用狀來りても其夜は寐られすこの頃は寐さけをやめてみたるにのむと少もかはらすされは不益のものなれは字にても書ときに限りのむ積り也

○十日　晴　民藏夫婦立田へ行法隆寺のいにしへの躰をみ且立田川のもみちを見て來りたりもみち百六七十より二百余もあるへし立田川の左右にありていまさかり也といふけしき也と也立田川は六七間はかりの砂川

にて一尺はかりなる深さの水にて底にいる魚よくみゆるよし也水面も其あたりもみな緋ちりめんのことしなといひきともに行たるものゝうちにこゝには百人首のうちのうたありとか申て名所なるか實に驚といひしに夫よから紅になにとかいひしといひしと民藏妻いひけれはあなたは御うたよみといひしと也其外ともに行しものゝうちに右之一言の外雅言なかりきと也四顧寂寥としてみる者外になしと語りき不運なるもみちか或はつまらぬうたなと人の來りてよまぬをもみちはよろこふなるへし今の立田川はいにしへのうたにある立田川大にこと也今のもみちは後人の立田川といふによせて多植たるものにて夫故に俗地也と申也

○十一日　くもり　此ほと稻を刈上てみるに更にとりみ少し次第に米高直になりて奉行所への書上は上米九十二匁内實は百匁以上也と風聞する也奉行所之書上やすきは市中此ほとの石代直段を大和一國御料所の石代となる也夫故に御料所百姓共米屋共へ金を遣し此ほとの表相場を立もらふこと也この弊越後其外御料所多き村々にいつもあること也石代三匁も違ふと御取箇はよほと減するわけになる也乍去民はゆるむ也御料所の石代よほとこゝろせねはならす別而ならしの願石代にいたりては大なる僞ありて其筋のもの大に潤ふこと也○此米日々上りて表向も百五匁ならしに成尤上米也

○十二日　くもり　此ほと與力か書し黃昏に其旨村役人に答置候とは乍申と認たるを申聞置候とは乍申と直して扱いふかゝること多し文章に倭臭あり雅文にさとびことはあり奉行所の書もの俗談平話にして下人によくわかるをよしとすされ共倭臭さとひことはのことく俗言のあやまりを奉行所之書物にはなりかたし譬は腰懸を御腰懸といふ類やゝもすれはいふこと也よく差別して書へしと申聞たりわれ田舍流義の吟味書を少も直さす文段またしかり乍去これは書たりし男よく筆のきくわかものなれは敎置し也其時申聞せしは御觸書なと一國觸をするに決して六ケ敷ことを

いはすかなを交ゆるもよしされ共かな違ひのヒとイキオとヲなとの類はよくたゝし辭は少々うちあかりてかゝすしては奉行所の辭にならす耳近く雅言ならすしてあやまりことはあやまりの熟字なくきり短にして意のつらぬくこれ御觸書の躰也と申たりき○去ル十日九月廿七日までの御用狀來る先以母上樣御機嫌克其外之御無事目出度候○佐州ハ異國船參り候由いやなる事也西洋船對州の間を通り夫ゟ佐州ハへ廻り蝦夷地のからふとゝそうやの間を通りてカムサスカ其外ハ廻り候義はレサノツト或は又ホフシトフとも云此人長崎より歸りにはしめて廻りて日本の北海をうかゝひしといふ也この說據あるかことし安永の地球圖に日本の北海に針路のあとなし徵とするにたる也南海に二艘北海に壹艘ふねありては日本人奔命につかるゝ也奔命につかるゝとはあちらこちらへ走廻りて國のつかるゝことをいふ也左傳の字也歎息せり良策のことなにかあるへき良策は器也人は遣ひ人也遣ふ人あれは良策おのつから出來る也遣ふ人なけれは良策少も役にたゝぬ也良策は人ありてのこと也みたりに策を述ふると遣ひ人ではなくて却ゟ万一異國へ聞ゆると大にたねにさるゝこと也間宮林藏へイキリスの醫者より手帋をよこしたるにて知るへしこの頃ある人ハ答たる書あり左に記すわか詩文章のことは林大内記佐藤捨藏決ゟするなと申されたれは四十年一度もつくらすされ共今は閑暇のこと故に戲にする也不文勿論也

聖謨頓首謹復某足下日昏下問以英夷窺覬之事再三而山國冗散之衙亦有訟獄之事加之俗事紛擾復書遲緩請海涵焉抑西戎窺覬之機既久矣僕在寺社奉行之衙下查箱館之民通商於西戎獄又所友渡邊昇間宮林藏常論西戎之事不止故得聞大要而後大久保加賀守某爲首相時以錯聞擢爲御勘定吟味役而預知西洋海舶之事唱浦ゝ懸由之昇林藏之徒日多來論駁焉頃之相公卒無人島之獄起昇之徒被罪者衆僕幸免羅織而後數年屢移職時非不論西戎之事皆答執政之問耳而昔歲移此地其職雖管山外州四十九万石地萬山四

文晁三本檣ニテ帆の多クカケタル圖チ畫テよこの舟のよるてふこと夢の間もわすれぬはよの寶也け

觸髏晴川院筆文天詳詩佐藤一齊詩鐫一乘

遠。西洋海舶之事。棄爲高閣上物數年焉。唯讀書馳馬。或弄風月消閑而已。頃來仄聞英夷屢來浦賀。懷昇之徒陷身於刑辟有所言。寤寐患國家之患飲食亦不爲。而非其職漫論古人之所戒。是僕所以不答於再三問也。足下幸休怪焉。然朋友之義。敢一言。僕昔製臨戰陣刀今猶存焉。裝欄鐫以松平樂翁老公題西洋舶國詩其意云。慮西洋舶來夢寐之間。不可忘。僕服老公早言其事採之。廟堂之策。豈莫在其中乎。副刀之小刀靶。鐫以髑髏與宋文信國公詩。其詩曰。唯以丹心照汗青夫信國公之事。昇平之世。如無所用。而至誠事君。誰不尊之。僕聞。至誠生至明。以足下之才。以至誠籌之。虜之情如開明鏡照妍媸。奇策乍成。天下永受其賜矣。

卽圖附別紙唯足下擇焉。

かく記したれと遣はさゝりける是にゐは眞面目なし一向に役にたゝす○身延の開帳三千兩あまり候由新右衞門の嚴敷によりしなるへし日蓮に利益あるならは新右衞門ゐ第一に利益を與ふるなるへし○新右衞門は用途金熊野三山を恐るゝといふこと尤至極也夫にて少々安心したり可恐のかきり也序に云過日熊野社家惣代玉置縫殿義我機嫌聞に參る積之處道中を急く故にとて縞縮緬二反紀州之御家來森下孫兵衞持參したりよつていふ今役はかはりたれと以前よりして出家社人百姓等之ものは不及申諸家之家來之もの一度ももらひたることなし既に例之塩路新次郎と十年余も突合たれと一文のものにても貰ひしことなし是は新次郎證人也今般孫兵衞ゐ對し申すにあらすとて歸したり同人甚敷こまりてみな一位殿之御手當にて縫殿は表向之事也既に今般も縫殿へ五百兩外社家ゐ三百兩御手當被下所々ゐ被遣物之反物其外長もち五棹あり此反物も其内なりしか申上かた不宜恐入たる也いつれ御國ゐ可申遣とて如鼠になりて歸りたり新右衞門の心得方あるへし少も油斷すへからす尤可恐事也其時はなしに聞にいろ〳〵のことを水野土佐守いふは寺社奉行所々申上になりたるものか或は土佐守考か寺社奉行所にても知らぬことを御老中々御達に相成樣にては新右衞門なと紀州の懸りは斷もの也よく御心得あるへし甚不安心也○

海丹忝候書狀到來之日に與力共ゟ居間にて酒給させ候處夜五時頃に相成書狀到來別條なしとの事故に夫に不拘居間に居て末つかたに退坐してかのうにを開らき大根おろしのうちへ加へ給たるに味至ゟよろし夫にて奥之居間にて酒三ッを又給たり其頃は與力共も歸りたれは則別帋の詩を認申候懸御目候御論承りたく候これは楠の詩に御座候武士はこれにてことたるへきかに候いかゝ書躰其外とも承り度且過酒なといたし不申候證據御覽可被下候いにしへの聖賢飲食男女をもて節要として夫より工夫をしたるといふことをこのほとわか學文に御座候其しるし懸御目たくと酒後之一枚まゐらせ候○菊のこと御うらやましく候其ことにいたりては落涙の外可申義無之候いつか母上并新右衞門らと酒くみかはし可申哉兄弟はまだまだ二十年余のこと也母上に早く御目にかゝりたし○鐘三郎養子相談之義聊存意無之候夫はわか子供より身上まて任せ切候新右衞門にて寺社奉行所にても御用向を新右衞門へまかせ切候人也其人のよしとおもふこと必よかるへしわれ少も存意無之候さて夫は別事也わかおもふことをしるすよく御取捨あるへし○其人何故に持參金を望候哉三百俵のたゞの養子には高過はいたし不申候哉何故に持參をのそみ候哉御紏候ゟ相分り候哉○三百俵の御小納戸ならは御小性其外より緣談申込多可有之候何故御取立ものゝ我らことくなるものと緣談いたし候哉○養祖父の年齡五十前後に候はゝ御勘辨ものか年齡書狀に不相見候五十前後と申候はゝ必四十三四歟いつれ新右衞門位に可有之候○養父の娘に配偶いたし候由に候得は當主も三十四五より當年四十位までの人に可有之候年若にて何故養子いたし候哉其紏不相見候○當人の親類緣者其外之義は聞紏候はゝよく可相分候相談之決着以前に可相分候此こと得と御紏ものそのためにてはよろしからす候○銕作を遣し候節は内々寺社奉行所之内探り方之同心の世話にて風聞たゝしいたし申候夫は万一之義有之候節は申譯無之故に候○三島の文通にては取極には不相成候わるくは不申わけに御座候○鐘三郎事万

々一不縁に相成候節は十年之間は養子に被參不申候こゝの所大切に御座候○養子のことわか父上なとは早合點に被爲入候ゑこまり候義御座候御同前に當時のことくなるはコボレ幸ひと御承知可被成候このこと甚以不容易候くらやくの借金なと直に可相分候これは御藏手代又は内さくりかたにて可相分候御藏手代はいくらも組頭衆弓之御突合之内に可有之候以上之義を御穿鑿にゑ少も心さはり無之候得は十分に候幸三郎縁談之節風聞糺不宜候ゑ追ゑ相分り候誰もわるく申候人は無之候其頃母上にも申上候知らぬ人との縁組よしときゝたるは實事に候とも其外きかぬ事しらぬ事は皆よからぬ事に御座候知ル人の縁組よからぬと此方にゑかそへ上ケ候外の事はみなよき事に御座候もらひ候と違ひやりかたは十年の日かけ物に相成候間其節後悔いたし候ゑもいたし方無之候久須美の次男よき人にゑ不運にて日かけ物にゑ一生涯終り申候養子のことは不穿鑿の事有之候はゝ可憐大切の子に追ゑ苦勞をかけなかせ候事多御座候是等之義我はよく相辨居候よく御勘辨之上得と十二分にも十五分にも御穿鑿可被成候遣し候ゑ跡にてはいたし方無之候聞しよりよく候得は子も居附申候いやと申候得は叱り候義も出來申候夫か相違いたし候得は子をカハイクおもひ候ゑ却ゑ熱湯を呑ませ子も口外ならす親もくやしくいたし方無之か世間に間々有之候よく〳〵御勘辨可被成候一躰は存寄無之候得共心附候義を不申遣候ゑは不實に付相しるし候御筋本は御筋本同士にゑふることく（如降）によき縁は有之候夫を御取立ものと縁をくみ可申と申候はよく御穿鑿之上被遣候方と存候鐘三郎不便に存新右衛門を大事におもひ候まゝことことくにしるし候容易に御覽あるましく候あつき涙の出候とき子は可憐ものに御座候新右衛門は其苦勞不存候間とくとしるし候○幸三郎書狀之内太郎事彰常のことくにおもひ候はゝ宜ケ間敷と申候義相見候定ゑ左もあるへし何卒太郎義を不便におもひ候人有之候はゝ打より候ゑアタマを打つゝけにうち候ゑ惣身になま疵絶不申候樣なし可被下候よつて別帋にし

るし候ゐ差遣申候右はいつくへか御はり出し置可被下候元來は慈母等ゑ手をはなれ居候間此節一生をよくいたし候種に候處母上の御あはれみ新右衞門夫婦の御あはれみにてあまへ候事と相見候これも無余義とも難有とも可申候得共乍去いかにも嚴敷いたし不申候ゐは不相成候同し位の人にては嚴敷いたし候ほととしをとりよく相成候あまやかし云芽（イフメ）のふきたる子幸にあしくなり不申候とも天より賜はりたるを全にみかき出し候事かたく候

○十三日　晴　與力共ゑ酒爲給ゐ帶地一筋ッヽ遣す○與力共に酒のまぬものなしこゝの與力共は奉行を主人の通にする也脇差を奥と表の間にとり出る也其余右に准す

○十四日　曇　中院屋ゑ拜禮として參るこのほと例ゑ通早く起て刀鎗をなしみるに夏と違ひて冬はいつも別ゐこゝろよし力ますかことし不思議なるもの也おさとは霜かふれは大に恐れわれは霜かふれは大によろこふ人々ことなるもの也來月はとても出來す一兩日のうちに庭の月みをすへしといへはみな〳〵恐るゝ也我いふ後赤壁は十月也十月ふねにて月みをする例あれは庭にて焚火しなから月をみる何のこともあらしといふ也

○十五日　曇　月並ゑ禮受ること例の如し○一昨日久須美へ見舞の使出す○十二日には母上の御例によりて例ゑ日蓮の會式いたすおさと女と菜園のいも人參なととりて江戸の通りいたす菜園ありて精進物にて買たるは豆腐なと位のことなるへし人參出來けしからす長サは六七寸より七八寸位なれ共大成は差わたし三寸五六分あり江戸の大根よりふとし味至ゐよし○かうろき猶なく氷なし

○十六日　晴　昨夜は月よし月前のもみちをみむとて庭へ五時頃より出て遊ひたり所々の落葉なと中間にかきあつめさせしに夥あり夫ゑ火を附たるに一二間はかりそばへゑはよられぬほとあつし霜のふるをも覺へすおさと市三郎等と四過まて庭に遊ひ居たり夫々馬場なと歩行て深夜にふ

せりたりならに居るはこれはかりよし火事ならぬといふもの故火のこと至ゐゆるやか也市中に千年以上不焚（ヤカ）てらはいくらもあり○昨夜は輿に乗して北の方にある馬場へ行て畑にある大根をみつから拔夫ゑ西北の隅にあるいなりへ行たるに藪のうちより鹿出て大に驚たり

○十七日　晴　昔石川左近將監のかたへ行たるとき時節はいたし方も無之と申たれはよき御役人になる積なれは時節とはいはぬものそといひき書經の天功をたすくるといふ意とみえたりこの人腹より出たる說也山陽か唐の裴度といふ人を論して天下の人にあれはといひておもはるゝ人は天下中の責を引受天下の權をたもつものは天下の恤を患ふといひたり確論也○ならにて與力のわるきことあれはみなわかとか也夫をおし廣めていへは役人にあしきこと可歎ことあれは執政のとかとも可申也人選其外のことみな執政の任にて外人の手出しのならぬこと也其內人選執政の第一のこと也いにしへ夫等之事を人に自由にさるゝ人愚か弱きか奸人にて職をのみ大事にして躰をつくり居る人也歷史をよみても夫に目かつくとよく時勢のわかる也其とかみな執政に歸すること也しかるをしらすして執政の甘き辭になつむと飛た目に逢也賈充か成濟を殺して申譯をなし夫より上は景帝か罷錯を殺して吳楚七國へ申わけをしたる類也可恐のかきり也かゝることをする人多く柔弱の人にあること也新右衞門なと御用透に歷史を讀ならはこゝろしてみるへし

○十八日　くもり　十四日に記すへきことを忘れたり同日夜にいりて宅狀來る○四郎か家內日割通歸府いたしたるよし先以安心也さて母上樣は內藤へ被爲入候由御機嫌克御事恐悅其外之御無事目出度候○近藤遠江守參り候由右之人は新右衞門之元頭賴母といふ人の內實は子也新右衞門之緣にゐ賴母いろ〳〵申候ゐ遠江守飯田町九段坂の屋敷を新見ゐ被下候節御貸附之世話なと申たり矢部と申談世話いたし遣夫ゑ緣にて今にきたる也新右衞門は丁寧別段にする由尤也先之困りに不拘いにしへをおもひ禮

をつくすへしされはとて次ゑ間にゑ手をつきものをいふにも不及深切にして丁寧にすへき事也新右衞門ゑ取計日記ゑ躰よろし○淨土宗の地獄極樂のおとりゑ具のことめつらし右は先年太田攝津守殿懸りに奥澤村九品佛に廿五菩薩來迎會といふことありて夫にやゝ似たることをさし留たることありき其頃增上寺なとより申立ゑ品も有之と覺たりしかるに後に通鑑をみるに六朝のころより追々みゆること也いにしへ日本にゑも多用ひしとみえ東大寺なとに佛具のうちいろ〳〵の面あり其のどりなるへし六朝又は唐の頃なとは宮女のかふりて踊しかと覺たり○菊見によくこそ豐藤を御呼被成たり御馳走ゑ獻立等承候とり〳〵よろし○豐藤より樂翁殿ゑかけものくれられ候由氣のとく也○不二孝のことい さゝか心附なしならの品も此ほと進達ゑ積也不二孝のこと決ゑ不止ます〳〵さかりになるへし後年ゑ害をも品に寄なすへし此節ゑ不二孝は理學にて至ゑおもしろきことにて根本は易或は王陽明なとのことときことの泰山の丘垤河海行潦にて富士とけしツブほとの相違なれと味ある故に止へからすとおもふ也これにつき說ありとても云ても不被行事故捨置也○新右衞門落馬のうち身再發ゑ由可怪事也うち身の再發といふことはなき事也必病ひ也其譯は元來腹にこりありて筋へ引はる也夫故に筋のめくりあしゝよつて以前うちたるところ全に治さぬ也うちたるか病ひの力をかりて害をなす也老後に及ひて可恐事也我右ゑ大指を十六歳の時くじきて新右衞門知る通三十はかりの時劒術にて大にこまりてなくらに見もらひたるにくじきは聊也癇症故にかくのことしとて服藥を敎へてもみくれたり正しくうちたるに無相違をかくいふは不審さよと內心大に笑たるに此ほとになりてなくらの尤なることを得としれりうち身なとの類却ゑ治するときは木のつきほのことしとしを經て再ひ起ることなししかるに病あるによりて其筋骨の血のめくり不宜夫故に上直りをなし居る也決ゑ疑ふへからす針のことをしる按摩をよひ痟經（ケイ）をもみもらふへし必痟經の筋いたむへしこれたしか

成こと也むし齒なといふものも腹のこりの筋よりして其邊の氣血不めくりに成て口熱にてくちくさるゝ也これらはわかゝらたにてたしかにためしたり此ほとは家來の顏を一見して汝けふは左に病ひあり右に病ひありとてためしみるに多くあたる也みな筋のふとくなる故にしるゝこと也新右衞門なと必大さいこ湯に桂枝苓等附湯を日々一ふくつゝ三十日のみて其後にはらの筋をよくためしみるへし我日々にためし按摩にもませてみな證據あること也決あやす〳〵と聞て等閑に成へからすからだあしくては御奉公のならぬ也其うち身中酒幷女あしゝ湯尤あしゝ心すへし長湯大どく也これらのことなくらにて敎もらひためしてとくとしりたりなくらはもみみて昨夜の房事を知る也あさむくことならぬ也それらはよくためせはしるゝこと也

○十九日　くもり　此ほと氣分よほとよし尤常々四月五月は病ありて十一月前後は健也けさはためしに壹貫目はかりゑ居合刀にゑ一かたに受ふり二千本いたしたれ共少しもくたひれす手なとへこらぬ也日記は卽これを其手にてしるす也顚（フルヘ）さるにてしるへし其外やりのすこき等は別に例ゑ通にしたる也これにては當分氣遣なきかことし乍去病氣は常に快ときにきさししくじりは勢盛なるときにめくめりこゝか大切に養生すへきところとおもふ也○市三郎の鑓少々覺て寶藏院なとをつゝけに遣ふなれと我と遣ふと息きれてへこ〳〵になる也乍去わか息は少もきれぬ也母上御安心可被下候よつて記之

○廿日　晴　此ほと過暖也朝五時に五十八度以上也當年の夏の冷氣によるものか乍去此躰にて十二月に雪なくは五月までは米五十兩以上なるへし○此頃ある人のふみ書たるに旅の贈り物に井けたをおくりたるといふことありいかなることにや新右衞門の紋所也しるやいかに一寸おもひ出てす候合類節用といふ俗書に幹この字に井けたとかなせり乍去幹の字は元來木又は草の莖（クキ）といふ字なれは易にも貞は事の幹也とありて朱子の語

醸は酒をかもすといふ字也夫をかりて寒讓雪といふ類いとく〵多し莊子も其るいなるへし莊子のはしめに鵬の字ありおのれかともといふ心にて朋の篇に鳥をつけたるなるへし魚に鯤あり昆は昆弟とつゝく字也これも莊子のつくり字也幹も文章のはたらきにて遣ひたるにて幹の字全の井けたにはあらぬ也

類に垣を築立る眞ほうの木のことしとかありしと覺たり幹は都ゐ物事に主として重立取計の意也父の蠱を幹すといふことも易にあり以上は去聲の時也さて平聲によみて莊子に井のうちの蛙のところに井幹の字あり是はいかさまにもいけたといふもの井に主たるもの故なるへし乍去井といふ字を加へて用をなす也夫を字引に幹は井欄也といふより節用に幹一字を井けたとよみしなるへし字書に四角又は八角なるものといへは今のいけた也一字にて井けたといふ訓いかゝあるへきさて又幹に杖の義ありそれは周禮の考工記に罪人を打しもとは荊の幹をもてつくるといふ孟子にも杖をつくりて秦楚の堅甲をうつとよむ杖なるへし夫より幹は杖にて和訓いけたなといふひかよみを歌のはし書にせしやいけたといふものを旅のはな向にすることを聞かすと答たり以上は龍介か歌よむ友に聞かれてこまりていろ〵しらへたるをわれか譯せし也もとより出まかせ也夫によりておもふに陣中の井樓をくむといふも井けたの如きものを組て高くする也蒸物の井樓も夫より出たる名なるへし文選にも井欄の高きにのほりて目かまはることく覺しなと其外樓のことくものあれは夫は相違あるましケダは方の義にてこれ井上の紋の井けた也今も風流なる井戸にはあり夫によりておもへは井のふちへ木を井になしたるかいけたのはしまりなるへし夫は井の字躰にてもしるへし又井筒とよむ人もありこれは筒といふ字によれは今のいとかはのことくもの出來しのちのことなるへし乍去岩井つゝ」板井つゝ」つゝいづゝ（伊せものかたり）なといひて歌には井けたとはいはねは和訓に井戸かはをいふ時はいづゝといひて可なるかことしされとも源氏のいよの湯けたなとの例もあり四角なるものを方（ケタ）とはいはれぬ故に紋所にいふときは井桁（ケタ）といふ方か

○廿一日　雨　去ル十九日に細川の家來高野結城藤堂和泉守家來佐々時之助其外兩三輩寶藏院へ仕合に來る市三郎をも呼に來るわれ市三郎にいふ汝か藝中々他流試合なとすへき藝にあらす乍去先生之くり出しならは

遣ふへしわるひれ尻込すへからすさてはしめの一本限也あとはまけてもよし遣はゞかまやりよしはしめに場をみて遣ふへし立上りたらはめをねふりてもよし飛込へし手もとにて勝負せよと申付遣したり市三郎はしめに時之助と遣ひたりかまをもちたらは其人長刀遣ひたるかすやりをとりしと也巧者なる人故に大に場をもち出して鑓をすへたりけれは場かつまり候少々御引被下とて場の釣合をつけたり扨立合になり鑓もちて仕かけ來りし時わきを向て居たる故に先ゝ人引たり引を相圖に立合てとひ込たる故に先の人驚てやりをつき出したる故にやり下りてもゝへあたりかまやりは面へあたりたる故に市三郎勝になりたり次も又しかりあとはまけしと也先の人はなか〳〵市三郎の類にあらすみな上手也我いふ先にてやりを落したらは突へからすかまやりを莖短にもちてよせ膝頭の邊をつくへしと申付遣したり果してやりを落たるときに前のことくに構へて行たらは先の人まいりたりといひしと也相弟子のうちに同しことありて面をつきかけて手つかみにされしと也前の立合の仕かたは酒井先生われへ他所のものと遣ふときの傳授を敎へし也はしめに弱々と場にのそみて竹刀をとると飛込て逆の小手へうち込といふことを先生の常に仰られしかよくおもへは孫子のはしめは娘のことくにしてかゝるときは兎のあみを脱て飛出したるかことくすへしといひしと一理也孫子に兵は拙速を貴ふこのことよく神速といへと孫子には拙速とあり下の巧といふ字に對し甚おもしろし　巧にして遲きことをきかすとあると符合する也酒井先生は上手なる人也おしき人短命也當年五十八位の御人なるへきを四十六にて失給ひし也

○廿二日　曇　去る廿日には兼ゝ寶藏院より與力共槍術出精の躰みせ度に付いつ方ゝ歟參り候序立寄の格にて廿日には出席いたし呉候樣とゝ義に付略供にゝ參る寶藏院は興福寺の地中なれと構ひの外也直に稽古場の門より參る稽古場の門といへと瓦やねひらき門にて立派なること也門内に與力共稽古として參るもの共立出て平服せり寶藏院の後見滿田權平と

いふもの案内いたす寶藏院は白き衣に紫のさしこをはき大脇差をさして稽古場の上り口に出迎たり稽古場は瓦ふきはいふもさら也立派なること目を驚せり三間に七間のから板にて柱六寸角にて板式はひのきふしなし（六尺六寸間也）にて釘を表へうたすすきめもなく全に能舞臺のことし稽古場のはめへ竹すたれのことくにやりをかけたるに二尺もあまれるに其高サを思ふへし見物所は床附八疊にて次之間もひろしうしろは通し椽也御門主御覽のときのためのよしみすをかくるまうけありてみな高麗べり也圓なる額をかけたり字は唯心藏とあり朝鮮人の筆也稽古場の隅に宕愛の將軍地藏幷春日の赤童子といふものを勸請して元祖胤榮の像ありこの所も八疊はかりにてごう天井也わか坐は毛氈を敷金屏風立あり次之間はわか召連たる給人近習幷今日召連參り候老分の與力共三人かた衣にて着坐せり稽古場にいる側附にて其いるかはの末にのれむをかけありそこに稽古する人々は溜り居てしたくする躰なれとみえすけふは織田の家來六人種田幷無邊流（地藏前に月顯堂とあり胤榮自筆）

のもの仕合として來る與力之内四人同心二人遣ひたりはしめは寶藏院遣ひたりころもの袖を首へかふれはたすきに不及して奇也さしこを着たれは別に袴なしこのさしことといふものを奈良の出家はみなはく也御門主は紫の御柳に白き織出しあるもの也さし貫の裾をきりたるもの也御門主なと御酒にても被召上或は御樂のときころもを御免ありてもみなさしこを着用して居る故に至ゟよき也關東にてはなせせぬことにや扨寶藏院表うら幷鎌の術丸背を遣ひたり夫より仕合をもみな〳〵したり市三郎も遣ひたり末に市三郎と寶藏院と遣ひたり其時は院主も並之稽古着にて遣ひたり市三郎のかた少々よし先ッ似たるもの也寶藏院の後見幷家來共二人みな遣ひし也後見はか也に遣ふ也家來二人は市三郎位のもの也寶藏院はわか槍術の家本なれは院主の遣ふうちはわれ毛氈より下りて見居たり畢ゟ酒なと出る一わたりにのみて院主より一わか方ゟ盃をもらひたり院主いたく恐入よしいふ故に左にあらすわれに戰場のこと敎る人の家本なれは豈

不敬乎とて強ゐもらゐたり元來茶はかりの約束故に院主へ二百疋と干鯛のことき箱へ入たる葉たはこ後見へ百疋遣したれと寶藏院はよほとの入用なるへし寶藏院は鑓の遣ひ口いつれもたるしかたはいにしへの躰なく今の江戸風也おもふに清水次郎か風うつりしなるへし四年之間御用之外にては御門主へ被召るゝ外今日初ゐ私事にて外出したり其外には春日の藤東大寺のさくらなとをいまにみしことなし眉間寺は　聖武帝の御陵ありて坐敷みかさやまの月をみるに奈良第一の地なれは虫を聞なから行へしといひなからはつかに六七町の所なれと今に行たることなし醫師の抱やしきへ松たけかりに代々の奉行みな行とて當年も段々と願ひたれと行かぬ也

○廿三日　くもり　此ほとけしからす暖氣也朝五十七度也けしからぬこと故これにてつゝかは來年大ことなるへし乍去われおもふに夏の返しなるへけれは寒にいたりてさむくなるへし○けさ正七ツ出立にてたむけ山を過いつみ川を越て宇治のさと大池を經て伏見にいたり宇治川をわたり桃山道をこのもゝ山といふは大閤殿下の御城にて鳥井彦右衛門打死せし御城あと也今は畑となりて桃多く植あり故にもゝ山といふ也夫かいなり山のうちを通り大佛前にて小休いたし用達大宮通みいけあかる所若狹屋八兵衛方ゐ八半時過に着したりならかゝ京迄十里といへ共近し

○廿四日　くもり　のしめ麻上下にて「こし明也」所司代ゐ參る用人宮田安左衛門を以關東之恐悦として罷出候旨申上候處其旨可申上と之事也所司代は六七日以前かゝ御風邪にて少々御下血之氣味にて御引御逢なし伴金左衛門は疝積にて四五日引今日かゝ引込になりしと之事也所司代近來御病身之由左もあるへし四年已來上京之度々いつも〳〵十日はかり或は廿日位の御引之所ゐ參る也こまりたること也京都にては近々西丸御老中之御用召と之由風聞する也○きのふふしみのもゝ山にて

君のためそゝく血しほはもゝやまにみ千とせかけて名をとゝむらむ

もゝ山の玉の御殿跡絶て枯るゝ尾はなにこからしそふく

ふしみの大池といふはいにしへの巨くらの湖なるへし大閤殿下のころは淀川水行よろし故に大池になりけるか段々水逆行して今はさしわたし一里余と成たり

よと川の末うつもれて田の面を大くらの江にかへす白波

ならはしくれなしうたによむさまは京都のこと也

ことのはのさまはかくとそ夕しくれはれくもりするみやこちの空

からうたの鶏の聲橋の霜けにもとおもふ旅衣かな

なら人はおとろかれけりしくれして八幡の山にかゝる村雲

○廿五日　かこの中にゐ京都へ参りたることを

霜曉桃川渡未昏到帝京烟霞十里隔寒涸一層勍慣閑麋鹿衙罕看鳳凰城

拭眼紅裙艶飛魂紫陌彭屐鞋徹宵過鼓折報更明羈寓商閭隘愁眠客枕驚

隣舂牀壁顫乗馬戸庭鳴如何旅中旅辛苦守孤檠

この意は霜のあかつきにいつみ川をわたりて日のくれぬうちに京都まて参りたかはつか十里のけふりかすみの隔なれとさむさは一段と勍ことてさて又さひしき鹿のいる御役所からたま〳〵鳳凰のやうな御城へきてみれは眼をぬくつてみる樣なあかき裾の女ともか居るし肝をけす樣な町々のさかむなことしや夫故に夜通し下駄や草りてあるくおとかするし拍子木や御太鼓て夜の刻限もよくわかるたびのやとりは町やてせまくうきたひのねふりてまくらもおちつかぬ事て隣て米をつく音てゆかやかへまてふるへるしつれて來た馬ははなのさきてなくなりとをしたものちやそあゝ旅の中てまた旅をして辛苦いたしてさひしひあんとんとくひ引をして居ることとてこさる」母上のためにこれをよみて御聞にいるへし自分の詩の國字解はめつらしきことなるへし

○廿六日　はれ　三十六度のさむさ也乍去氷はなし○廿四日には所司代ゐ参り旅宿ゐ歸りたるに神尾安太郎甲冑其外大小小道具なとをもち來り

て九ッ半時より夕くれまていろ〳〵のはなしをなして京都のさまなと詳に聞たりこの人十四年京都に居るといふ也夜食畢ると西村藤藏來るこれは唐本位は自由によむ才力ある五十七八はかりの男也同心にて別段ゑ譯にて筆下なれと肩衣着用するもの也これも又刀或は甲冑をもち來りて京都のさまなといろ〳〵はなす也これは酒のむ人なれは酒なとを出し歴史より易のことなとはなして夜九ッ半時過まて居たり夫かはなしに大日如來の開帳とやらむ來りて豪家のもの日參のことし奉納もの金銀を費すこと夥し其内に奇なるはあまりの事にて狂言かつら數十人前をつくりて奉納をなしたるに大に入用かゝりたることなれと奉納されたる人もこまりたるよし夫にて其繁昌をしるへし佛に諂諛するさま筆につくされす腹をかゝゆることあり○今日は京都より伏見まて肩輿にのり夫より歩行をして木津まて歩行したり曾ゐ歩行せねは大につかれたり京都より十二里也其内ふしみまて三里木津よりならまて五十町也其余は八里に及ふへし重き大小をさしてたちつけをはきて急歩行せし故か大にくたひれて殘念也われ大成やりを遣ひ太刀ふりて　公儀万一の御用の爲とおもひ居るにはつかに八里はかりにてくたひれては甲冑も武術の役なしこれ十六年はかりかこにのみのる故也よつて以後は槍其外を減して馬場を多く歩行てならすへしとおもふ也○京都を夜の引あけにめしを給出立してならへ歸りたるに日いまたくれす十里はかりに近しとのみおもひ居しにしらへみれは十二里余也乍去平坦の地にて歩行よしとみえたり

○廿七日　くもり朝四十二度　昨日起出てみるに草臥全にのきたり乍去めつらしくよく寐て五ッ頃ゑよあけまて一ね入也よつて鑓は遣はす乍去このくらゐにてはまだ〳〵からたよしとおもひてます〳〵はけむつもり也○藤藏といろ〳〵の話の内に來山陽の文をみるに日本未曾有の文人也書もよしとおもひてならにて所々の所藏をみるに書今一段よかるへし贋物のみ也とおもふといひしに山陽をいたくそしりて乍去一二幅は無紛正眞を

もてりかれこときものも御前のことき才を愛し給御人あれは卓爾たる御眼もくらみ候なるへし卽この一ふくを奉るへしといひてくれたりなる程にせにあらねとも書に氣韻なしこれ山陽の人に議せらるゝ所あるところとみゆまゝす〳〵おもふは手習の師といふ米庵か類のとるにたらさることたとひかなりに出來ても人まねするにて狂言の類也近來の能書は栗山なるへし栗山のよき書はとゝへ置てみるともかなりつゝきて精里なるへしかなは樂翁殿の六十前後の御時さては千蔭なるへし眞淵の書は儒者のこときものにて一風ありて絶倫也古躰の祖となるもけにとおもふ也宣長の書はもゝ瀨流にて是もいやしき氣分ふてにあらはれたりみつから罪人也としりなから惡事をいひちらし前後不都合なることをいふ丈の所なるへし吳〳〵も手習をして書をよくかゝるゝとはおもふへからぬ事也○今夜並便相屆く

○廿八日　晴　母上樣倍御機嫌克恐悅〻至其外〻御無事目出度候○過人出來候由實事に候哉可疑候○鐘三郎事再應〻御勤にて御相談御取極〻由逐々申遣候趣も候得共乍去彌よろしき事に候はゝ此上も無之義と大悅に候○おのふ宿下りいたし候由又々いろ〳〵世話に相成候事と歎息候○貞五郎書物方に相成候由右〻趣は大越よりも申來り候ゑ新右衞門ゟ厚申通候樣と〻事也ふみの長サ一尋はかり文略○新右衞門事多〻由左もあるへし小學の敎の淸緩勤この三ッ一もつゆの間もわするへからぬこと也わか兄弟淸も勤もか成に出來るなれとよく緩なること不能緩は急の反也いそくと仕損し多し此ほと新右衞門に脇より申ものなし仕損をすると獨ころひ也御用多ほと緩にすへき事也緩は手をあけて遊ひ居ることにあらす緩大のこゝろにてこゝろザハ〳〵として火事場のことく或はこのことをするうちはや次〻事を思ふの類也こゝろに斷絶あるは怠也たとへは繩を引切不申やうに張かことき味也我等〻修行のうち第一の六ケ敷事也○母上樣御書難有拜見御機嫌克御樣子恐悅〻御事○新家娘〻事御尤に御座候いつれ

とも相談可仕候○龍の口ゟ病人もよろしく候ゟ目出度候○さくらの菓子被食上候ゟ御意に叶候由難有候○人は用らるゝ事無之ひだり前になり候時にこゝろをよく養ひて行跡をよくせねはならぬ也君子と小人順境に居てさして不逆樣なれと逆境に居て天地をへたつる也世中にいれの起りてたとへは家來は不正をなし勝手は商人にたのみて大無盡いくらもいたし其身は酒色にふけりて女くるい長夜の飲酒にふけり夜は八ツ七ツにて朝は必四ツ位に起き表ゟ出ることなく夫故にからだも評判もわるくして其上癇積にて家來のみ叱りちらすなとゝいふやうなることはあるましきこと也かゝる人勢を得れは强滿早くして大變を仕出す也松平伊賀守殿なとの御引込中つゝしみの別段なること世に稱すること也伊賀守殿なとはいかなる逆境に居ても動かぬ人とみえたり御老中にてよき御人天下の御爲にならせらるゝなるへし新右衞門なと一旦御支配受し御人也こゝろして疎遠あるましく候

○廿九日　晴　霜つよし三十八度也泉水はいまた氷らす○與力共同心共みな麻上下にて御縁組ゟ恐悦を申出（これは廿八日）るこれわせたの一役の例のことし○今朝三十五度ゟさむさ也泉も氷る○昨夜吉藏來るよし民藏申聞る昨夜中（これは廿九日）三ゟ間の板敷を人いくたひもあるく音したる故に心配せしに右を承り安心せり

○晦日　晴　母上樣御機嫌克とゟ御事にゟ御文拜見何より御事御手蹟も御健なる躰別ゟ御事○おのふも下り候ゟ御逢被下候由新右衞門白ちりめんなとくれたるとの事いろ〳〵世話ゟ上の世話と存候義に御座候○鐘三郎ゟ縁談いろ〳〵と案事候處今便ゟ樣子にては大堀出しものにゟ何よりは養父もかたく其上甲府ゟ被召返候位ゟ人に候はゝ必よろしかると被存殊には御番入ゟもくろみも有之候由首尾能御番入いたし候得は居附も宜と別ゟ存候義に有之かゝる機會遠國相談にては參り不申文通にゟは余意不相分案事過し候事而已也此外にもかゝる事多可有之候くれ〳〵も

不申越候ゑは決着いたし不申候ゑは不相成候これにても遠國はいたし方無之候機會は一時を爭候ものに有之然ルを百里ゑ往來なか〳〵參り不申候

○くすりのことアンラカゑ義早速申付たれと無覺束事也井之場讃岐といふは勝南院宮内か師にて大和にはめつらしき名醫也此人かく症にて六ケ敷かりし也よつて稗（ヒエ）の粥壹合ッヽ給て世の交をたちて此ほとまて無恙勿論今以養生は已前のことく也と聞かくの病心配と美食至ゑとく也とて讃岐はかく療治をすといへは御奉公人なとのならぬこと也アンラカとかいふくすりを用ひしことを聞かす實によけれは藥店にあるはづ也○雷電剛雨夏雨のことし

○十一月朔日　曇　右ゑ藥いろ〳〵しらへみたるにならにアンラクハといふ痰咳のくすりあり所々にもあれと和州ゑ内にては多武峯名產也といふことわかりたりアンラクハといふものは和漢三才圖會山果類に菴羅果（アサ五十六度）てんぢくなし（アンロカコウ）此種未有於此とありて本草綱目を引て菴羅果出西域。梨及柰之類也とありよつておもへは天竺の果なるをいにしへ御取寄になりしものなるへし與力らか宅にもあり多くは實のならぬもの也早速に卽刻多武峯へ所望に遣したり○今日吉藏出立也（返書ゑ事也）書狀と少々相違あり書狀ゑ方よろし

○二日　晴　新右衞門ゑ書狀にはアンラカといふ草とありて大和國いつれの地より出るといふをしるさすよつていろ〳〵聞に醫師もしらすといふきくすりやもしらすと云前の菴羅菓は山果にて木實なれ共先夫（ッヽ）を遣す積と決したり乍去大和にあるものは味澁く苦して小兒もたべす本草にいふ所と大にことなり西域のものなれは味變して薏苡仁日本へ來りて珠數玉となる類其外同しことなからず大黃厚朴なといたく効をことにするの類にあらすや至ゑうまきものにして多食するとも無害なとあれと大和のものは牢口も食ふへからす必効あるへしとはおもはれぬこと也眞の菴羅菓は江戸の藥やにあるへし世にかゝることと多し可歎○おのふ女故にわさわ

さ飛脚を越したれと日備多くかゝるへし其入用にゐ道中三日きりを出せは半金にゐ今頃は途中半に返事の狀あるへし書面ゑ樣子にてはしらねとも吉藏はなしにてはおのふの藥用のことくいふ故にことの外いろ〳〵とおもへとも新右衞門の書狀おのふの自書によりて心は夫ゐ定たり

○三日　晴　きのふ易の豐の卦の彖傳をよみて日中則昃。月盈則食。天地盈虛。與時消息。而況於人乎。況於鬼神乎。といふにいたりて再ひ三たひ歎息したり世の中のことかくことくならぬことはなし盛なり目出度といふかきりの時にいろ〳〵のよからぬことをみな生する也其躰夏のさかりの只中に夏至の衰をきさし冬のおとろへのたゝなかに一陽來復する也このこと人はさら也鬼神といへともまぬかるゝことを得さる也され共易君子のためにまうけて小人のためにまうけす易陽をたすけて陰をおさへゆる事聖人の敎なれは靜にして其理に向ひ行て求めすさけす春夏秋冬衣服のあらたまるかことくなし行かねはならぬ也われ大に感することありて記す也この意中は筆にしるされす銘々の身に引受てしること也乍去衣食を貯て早く穴へ引こむ蟻の躰をみても勢ひはしくしるのはしめ人によくいはるゝはわるくいはるゝのたね也とおもへはうつかりとして土用ぬのこにて寒かたひらの患は少々まぬかるへしこのことといとかたしあゝいとかたし

○四日　晴　けふ市三郎にいふ世の中に親か苦をする子か樂をする孫か乞食すといふことあり川柳に

賣店とから樣て書三代目

ともあり御奉公其外ゑ苦勞をする故に暮しもケ成にて兩番小十人ゑ並高ゑ人とは莫太ゑ違ひ也夫をしらす若とのさまにて育られて愚になり居故に是非にしらみを拾ふ次第に至る也われなと三千石ほとの取ものあり夫にて今のくらし也夫を三百俵ゐ引附てみると平日みそなとをなめ居りて奢のかきり也其譯を露しらす親も氣か奢りてものを貯子孫の馬鹿にするたねをつくりたかる也大笑也とて歎息したり乍去慶安の御軍令たけの武

器はわたしてあとは親かみなうり拂て貧人に存命中くれ遣したらは品に寄またもよかるへきか五兩の金をもし人にやれは高慢の氣になる也其かねは子孫へのこすと一夜に遣はれて仕舞こと也御役にあるものこゝろすへき事也大夫は七十にして政をいたすといへは吾なと其としにならは必かくすへしとおもふ也

○五日　晴　三十八度のさむさ也池に薄氷あり米百匁と成○孫子によるときは士は五里のみちを歩行て甲冑を重くおもはぬ樣ならては少も役にたゝすしかるにわれ七里はかりの道を歩行たらは更に足きかぬかことし平日やりのすこき其外のこと凡一時ッゝは日々必かゝる也よつて月に六度ッゝ、其一時のひまに足を達者にすへしとおもひて馬場の歩行をはしめたり壹〆目のいや居刀に二尺の脇差をさし立つけにて馬場を歩行こと三十回六十町余也少ッゝ増して五里のみちを甲冑に歩行くたひれぬ樣にならし置へししからは馬にも乘ること故に五里のみちにてつかるゝことはあらしとおもふ也こゝに大笑あり泊り番の同心等密にみて御奉行さまもはや九四年にならせられたれは御歸りを御祈とみえて馬場のいなりへ折々百度詣あり國へ歸り度ものとみゆとて密にさゝやくと也大笑の事也○五里のみちといふは五十里にしていくさ半は至ると孫子にみゆされは定法は三十里多きか五十里也され共みちこそ三里なれと場所のかけ歩行二里位のことにはあらぬ也よつて甲冑にて五里自由に歩行のならぬ人は並々のさふらひにはならぬ也

○六日　大にさむし　江戸より眞書筆をとりよせて遣ふ也この頃勝藏か方ゟ上方より參るふてにて船間也といふことを申越たり江戸筆也とてほこり居たるに案外のことゝ驚てきかせみしに門前にあり直段壹本に付廿文にて八文下直也かゝることいくらもあるへし○今夜去ル廿五日附ゟ書狀相屆先以母上樣御機嫌克其外ゟ御無事目出度候先第一に申候は今夜はつね也とていはひこゝろにてまめのめしをたき豆腐汁小魚を四ッ買ひ

母上卓識

候ゟわれと御兩親様は一尾ッヽおさと市三郎は半分宛也これにてもいはひはいはひ也なといひてめしを給詩をつくり居たるに御狀にゟ母上の御めて度御はひ被遊候由にて其つまひらか成ことを御記し一族みなよりあつまり候ゟ御盃を被下候由等御しるし御歡之躰御高運のこと是等之義更に心遣ひ無之出來候は新右衞門も此ほとよく御奉公いたし居候故にて新右衞門之骨折莫太也右之如く兄弟三人勢ひよろしきことを御しるしの御盃を被下候ゟいか計か難有御事也さらは今夜はならにても御いはひの酒をのむへしとて粕づけの鮎なとにてふせり候節酒給申候○母上様之御文難有拜見其内に母上は私之歸りをは御まち被成候得共御奉公之ため遠方へ參り居り候は士たるものヽ常にて　公儀の御恩をも存愚痴に歸れとは不思召候由御としよらせ候ゟも御志之御さかむなる貞烈之御事既に私已前木曾山御用中御大病之節大切之御用をわか病氣也なとヽとてこヽろにかくる樣なること夢〳〵あるへからすと嚴敷御文なりき其時いにしへ漢の王陵か母といふ共御おとり不被成御卓見子は王陵か百分一もなしいさや貞烈に御奉公すへしと志を立候義御座候ひしか七十に被爲成候ゟ御志操におゐてはおとろへ不被成と奉感歎候義に御座候され共新右衞門日記中之樣子等を以其御樣子を奉察候ゟ夫婦打より袖ぬらし候義に御座候○新右衞門書狀之内御用多なから敬之字を忘れ不申候と之義御尤に御座候御用多ほと靜にいたし勢ある程へり下り可申候大切之事に御座候わか母上の御膝元へもはなれ居候と申はわか疎なる所よりして世にも聞へ勢ある時にメくみたる病發したるに可有之と一天下に身をうらみ候外一毫も余事は無之乍去不筋をいたし不申候故今この位にいたし居候と覺申候五十前に遠國諸大夫になり候ものも無之候此味新右衞門よく御心得あるへく候○御用多勢あるときは先例のなきことをせす平日屈たくして癇の出たる養子のことくなること可然被行不申候時は少も屈たくせぬことなるへし新右衞門何事も八分にして置とある尤也八分にてはまだつよし五分

謙チヘリクタリトヨムコトヲ
吾アルシ人ニ
チ滅ナ
下ルコトナリ

このこと人にもよるといへ共われら兄弟御奉公の場に臨とアヽ損と知なから身

たわすれてすること多故にかくいふ也

位なるへし易小陽は陰に不變老陽は陰に變すこれにても八分にては過るなるへしわれ人と相談するとき下役のいふことゝわか了簡をくらへ八分わか方よしとおもふは下役の了簡につくる也夫は六分とおもふは四分位にて下の善をみち引一ッ此次おもひ込ていふ一ッ差引八分よしとおもふこと五分にやう〳〵也故に右之如くにする也勢ある時の八分は品に寄十分に至る也可恐々々○十四日藤左衞門之弓感心也○新右衞門の書のおもひ附よろし母上の御讃ありかたく候○紀州之人に御逢不被成と之義至極也左もあるへし京都にゐはなしに紀州之貸附に寄出奔もの多しと也陰德をするつもりならは貸附をやめるほとのことなし天下の害あれほとのものなし縫殿よりは水野土佐は大金をかりたるなと風聞する也森下のはなしにて聞にいつれもきゝかねたる事也森下孫兵衞取次にてわれへも反物を縫殿方贈りたり塩路新次郎もしるへしかゝるもの昔よりもらひしことなしとて返却せり夫方三十日もあるへし○昨日一位殿方御庭織也とてち

りめん二反被下たり是は別事なれは拜戴したり紀州の躰かくの如し○紀州は江戸家老とわか山もめ居るよしの風聞也○岡本近江守より委細之書狀來る其内におさとへ手本をしるしくれたる禮にけしからぬ長き文をつくり遣したるに近江守ふかく感して其文をいたくらいよ守へ遣し其別帋へわれ十七才之時近江守をみてしる人になり夫より五十年の今にいたりて親しきよしいろ〳〵申遣したるよし然ルにいよのかみよりの書面に左衞門尉潔白のよしは兼ゐ及聞居候處丁寧之教示にて逐一承知奥方之義は一向不存候處歌文章と申手跡と申被仰下候通實に不凡之人と相察し候義にゐ右之文は拜借いたし置友人にも爲見候由或はわか事に感服して此節別ゐ歎息いたし候由等しるし有之候安中之板くら友人と申は宇和嶋侯西尾侯泉侯宮津侯松山侯大溝侯福山侯なとに付更に心配には不及候由しるし有之候おさと近來別ゐかたくなにて女の手跡なとみだりに人にみすへきものにあらすとてふかくかくし居る也岡もとの手本をくれたるとき老

人のこま〳〵と手本をしるして百里こされたるに禮申したしとて文をも勘辨してわれへのはなし書の躰にしてわれより遣したるに存外のことにて所々の諸侯の評になり殊に男子にかれこれいはるゝはつるのかきり也とていたくこまりてくど〳〵いふ也われいふおさとより人にみせたらはあしかりなむわれへ向ひて申たるをわかこゝろにて遣したるを何そぐと〳〵といふことやあるとて叱りたり○太郎事小利口なる人には無之候哉小利口なるもの大事出來不申候こまりたるもの也嚴敷するにしかす何卒ひどくして心を正敷僞のなき樣に御仕込可給候少にても僞をいはゞ二日ッゝ土藏ゟ入置候樣御取計可被下候いつれにも子供は嚴敷しておそれ不申してはわるくなる也嚴敷程の慈悲なしとくれ〳〵もおもひ候義に御座候○安中侯より　元陵御記藏板出來たりとて岡本近江守を以わか方ゟ被贈たり新右衞門一本は御もらひ可被成候寺社奉行ゟたのめは直に出來へし是は　靈元院法皇の　聖筆の御日記のことき物にておもしろきもの也御勘定所に居たるとき此内の例を引て申たることもありし也其跋を近江守武辨行といふものに長篇の古詩をつくりたりとしよりゆも氣はたしかなることゝみえし也おもしろき事也○近江守よりわれ十八歳の時より別段懇意ゑ由なと申遣したるによりくれたるとみえたり○鐘三郎相談ゑ事いよ〳〵よく相分りて安心せり○われ近江守のことに付ゆはなしありわれ十八歳の時御勘定所の湯呑所へ行みしに御勘定のうちにては別段なること鶴の鷄のうちに立たるかことき人あり驚てある人にとひしにあれは御勝手懸りゑ毛唐人よといひき名はいかにと聞しに岡本忠次郎といひし也扨は兼ゆきく朝鮮人を詩にて驚たる男也とおもひけれは知ル人になりたり忠次郎といふ頃忠次郎の火はちの前へ行は凡其人定り居たりし也其風彩をおもふへし夫よりいろ〳〵のことを聞てこの人御用向をせす遊ひ居るといふ人もあれと吟味役位になりたらはたらくへし吟味役に仕たきものと弱年こゝろにおもひしも可笑こと也夫か緣にて遂に二十年

余たちて吟味役にするまてはわかいろ〳〵といひし也もとは加賀守殿に
すゝめていろ〳〵談したる書面のこり居たるをもち出して人にも申せし
也加賀守殿ゟ節はいろ〳〵差支て小普請にてあり加賀守殿失給ひし後追
ゟ其書をみせたるに岡本大に驚て落涙せし也墓をまつりし文ありわか方
にあり小普請ゟ突懸吟味役にはいかゝといふことなと加賀守殿ゟ自書あ
りし也越前守の頃に申上て御代官になり夫ゟ七十一才にゟ御代官に成七
十五か六歳にて御勘定奉行に成七十七歳にて御鑓奉行になりし也これを
以おもへは今十七八歳の人をやすくおもふなれと決ゟあなとられぬこと
也市三郎を見て内藤の血筋も衰けるよと歎してしるす也

○八日　くもり　永井能登守被召候由ゟ吹聽有之○異國船の風聞をいふ
也いつれもとるにたらす虚説なるへし○おさとけろ〳〵也七日目也

○九日　雨　おさとのけろ〳〵あまりに早しよき祈禱者ありとて人のい
ふにまかせてよひしにより立の祈禱のことし乍去こよりをまげて人に持
せて廻さすること也其時に病症をよぶこと也われに病症を問ふ故に奇病
也名はなしよつてわか方にては常にげろ〳〵といふと申したるに祈禱者
大聲をあけてげろ〳〵の神はだがしただがしたした方へつむゝきやれと
いひていくたひふりてもみなわか方へ向く也われ甚こまれり亭主に仕た
方ゟつむはキャンといひて向ぶむは無余義次第なるへし祈禱者しばし考
てトツコに似たるものを書てこのさはり也といひてかき消すことくに消
たるも又一奇也

○十日　くもり又雨暖氣也　父上五日已前少々御過酒ゟ由尤猪口にゟ三
ツはかりも多かるへしと後におもふ位也しかるに夜八時頃小用に御起な
さるゝに御手足左右共に少もきかす母上大に御驚被成ていろ〳〵御世話
にて小用に御出被成候由夫は深夜故に少もしらす翌日は常の如し其こと
朝おさとへ御物語ありたるよしおさと申聞る故に驚てわれ行てみ奉るに
常のことしとの御事也されは共強ゟ御容躰うかゝふに左ゟ御ほう骨の上に

ある筋常よりふとし右に准し左之筋みなふとし我考にゐは品に寄中風御症を發せらるへしとおもふ也右之御眼になみた多し右によれは左に根さして右に發すへしと右に付醫師之事いろ〳〵申上れと御聞入なし民藏に申付を御聞被遊内々御斷之由これは酒のことを可申上と之御懸念なるへしよつて我今日急に醫師勝南院宮内を呼ひ御側に御附添申上候ゐ伺せしに當時御別條なし乍去御過酒ならは御中風のこと必と申上る御左之かたの御こり不宜万一御コロビ被成候ゐは以之外と申に付かけにゐつまひらかに用人よりきかせしにさしての御事は當時なし乍去腎分御不足にゐ御かたつまり候間此上御不養生ならは御中風なるへしといふよりてくすり之義申上たるに何分御斷也乍去われか申上ゐ先ッ御なくさみに十日はかり被召上はつになりたり右に付酒は一合余となれりよつて盃之御取やりは御止被成御ひとり分のとくりを定上けたりよつて江戸猪口之内より富士に早乙女の至ゐ小猪口を見出して奉りて右にゐ一とくりと定たり小猪口にて十はかりありとの御事也けふ夜にいり書をよみ居たるに御酒可被下と之御事に付參りしに母上は常の通父上は寂寞たること也我三十はかりのうちは父上母上われ三人にて三升の酒をのみたるにわれはたとひのむとも壹合はかり父上は壹合と定りたりわれ父上のさひしく思召躰をみて歸りておさとにかたりてなみた數行くたれりア、我なと今三千の鑓を遣ひ十里のみちを歩行徹夜書をよみて少もつかれすこのうちになにとそ公儀の御用に立たきもの也其内に万々一に異國船來らは何卒先手に被仰付候歟或は謀略に加りてとてもよくは出來すとも大名をわか采配につけて一日なりとはたらきて銃炮にあたりて万一敵に向ひて死したらはこれほとの願ひはあらしこれほとの願ひはあらしとくりかへしくりかへしおもひて人しらす落涙したりわれ井上と同居せし時は井上の老母四十三四にて兄弟三人あり其人々みな七十以上にて死して三人の兄弟今一人もなしされは人生は朝露のことし何卒万々一異國船來ることあらは銃炮のう

ちにすゝみて名を百世にのこしたらは忠も孝もかね全かるへしと氣分頻に引立たり父上の岩のことき御人かくの如し酒を多くのみてはならぬこと也百年の壽を一日にして御用に立たき事也○永井能登守被召近々出立之吹聽來る

○十一日　晴　宋の神宗皇帝の御世に王安石といふよからぬ人ありて天下を亂り遂に宋の亡基（ホロフルモトヒ）をなせり其内に青苗法と云よからぬ法あり人の知る所也今の貸附のことし夫を東坡か弟蘇徹といふ人の論するをみれは錢を以民にかすときは表向は御救といへ共乍去貸出し納の時にのそみてかゝりの役人姦をなすとあり今の御貸附其外にたのみ或はつけとゝけの類唐にては賄賂をとることなるへし其取締は出來かぬるとありさて又錢を百姓町人かうけとるとよき人にてもつい〳〵むだ遣ひをする也さて取立の時は嚴敷けれは必牢なとへやる也其次第になりては奉行所御代官所のこと煩しとあり紀州の貸附全この甚敷もの也其上紀州のかしつけをするものはみなやま師のかきり也よくて塩路新次郎之類也當表の森下孫兵衛なとはけしからぬもの也京都にて出奔もの也といふ也

○十二日　晴　昨日はやりのすこき汗出る朝四十六度也けしからぬ事也此ほとからた至而健也歩行を學ふこと武藝よりもよきかことし絶倒○アンラクハのこと詳成ものありとて長吏方聞に遣したり京都悲田院之ものも也答之趣先達而にかはらす返書之躰立派なること非人にも學者有とみえたり

○十三日　晴　來る廿一日いなりへ木辻町の遊女共俄をして奉納すへきといふことを内々願出積にて與力共相談せしといふ也いなり祭には能花相撲位のことはゆるしもすへし吾にして遊女の俄を屋敷内にてさすへしやかゝることを目ろむは大塩平八郎か謀反に同意してのあると同しことにて田舍には可驚ことあり

○十四日　晴　能狂言といふものはならより起る謠曲は興福寺にて公文

とかいふものをよむ節也といふさもあるへし昨夜おさと市三郎等と笑ていふ中間にものを申付ルを聞にヤア何ント仰せらるゝ」ハア心得ました」一段と宜シフござる或はそれは〳〵このましひものちやなといふ也全に狂言師のことし○二十八度のさむさ也風甚し

○十五日　晴　月並之禮受ること例のことし○このほと兩三日風ふくみな〳〵こごとをいふ也われいふならは風吹こと至ゑまれ也風をいやかりては江戸へ歸られすといふみな大に笑ふ三日ほとつゝきて風ふけとも少も塵なしめつらしき地也○父上御不快之事醫師參りていふはしめみ奉る時と變り都ゑ別段に御心よしこれならは子細なし出格の御健なる御生故也と申上る也一同大に安心せりみ奉りては御とし之三ッはかりもわかくならせられたり

○十六日　晴　寒四十度に下る○昨日いろ〳〵とおさとゝはなしのうちにいろ〳〵浮沈するうちのことなれは人をうらむこゝろあるあるへきに少もみえすといふ故に大に悅ていふは人を少にてもうらむこゝろあるを以士の大に耻とするところ也これによりて　公義のためにゆるされぬものはあれと人をうらむことは露せぬことを三四年來修行せりよりてかくはなりたり乍去いまた熟する所にいたらす此上は天命にまかすることを何卒こゝろより熟し知たきもの也其場にいたらは心のうちより眞のたのしみ來るへしおさとにわか少も人をうらむことなきをしられて大なる歡ひ也とかたりし也

○十七日　晴　一昨日長吏のもとより注進あり其趣は山田奉行之牢へ何もの共不知十人はかり來りて牢番人二人を切殺し牢内に居たりし入墨無宿二人一同逃去て行衛不知といふことにて其入墨無宿之名前をしるし京都の長吏か同類之ものより召捕方之義たのみ來し也元來遠國之奉行所之威光といふものは既になら奉行所に土藏たりといへ共いにしへより〴〵りなし與力らか宅等は兩戸をたつるといふことをしらす奉行所ゟ出入之も

のにても盗難はなしといふことを古よりのこと也京都なとしかりとかいふ也しかるに牢に入たるものを外より來牢番人を殺して奪去といふにいたりては殘念至極いふへき樣はなし御威光に拘りたること也長吏か風聞にては關東にてかられたる長脇差之徒かといふ也われ盗賊方之與力共を直に呼出し大和いせは隣國也必其惡黨共不來とはいはれす所々の番人共嚴敷穿鑿して踏込來るを召捕におゐては直に褒美を遣すへし扨又牢屋敷之義奉行所を去ること壹丁はかり也万々一異變之事あらは與力は鑓同心は銃炮なりとも持出して手向ひするものは一人なしに切殺すへしと申付たりよつてかゝることあるにてもしるへし武士強くなくてはならぬ也若き人別あ心懸へしと申付たり　公儀の牢を破り囚人を奪といふことは水滸傳ならてはきかぬこと也いかにも殘念也　公儀の御所置武と嚴とを以今一段嚴敷ならすは惡黨超過し良民難義すへし夜東海道の旅行ならぬなといふことは可歎のかきり今人牢屋見廻り之同心壹人當分助を申付る

道のりに直し二里余也

○十八日　晴　昨日は六時より五ツまてかゝりて腹卷を着用冑は不用目かた二十五斤余之大刀に壹尺九寸の脇差をさし六十六間の馬場を三十七邊往邊し其上いなり社の坂三十六歩十邊上りたりされ共腰の刀の當る所ゟ少々豆出來たるのみ足はくたひれす其外辨天社二百五十歩かけなから三邊往來したれ共くたひれすこれにてはいまた御用に立へしきのふは腹ことの外にへりてこゝろもちよく歩行は武藝をするよりも藥とみえたり左之方足袋のそこぬけたり大刀の重サ故なるへし大刀は三尺四寸の居合刀也けしからぬ重くつくりたるもの也懸目壹貫百目あり壹斤四十三匁三分之割也此こと徂徠の說也○右之足袋に付おもひたり沼田先生のはなしに遠乘をするに右之方ゟ重くなる樣にのるへし馬つかるゝといはれし足袋にて其說の尤なることをしる也武士は五里の歩行甲冑にて少もつかれさる樣ならては騎馬武者たり共用に立ましき也

○十九日　雨　昨夜より再過暖に成今朝四十八度也けしからぬ事也此躰

にて押參りたらははるは米三四兩上るへし京都は百九匁ならは百二匁也ならは百貳匁といふは僞あるへしいつれ百四五匁する筈也○いなり祭に付木辻町ゑ遊女共みな狐のよめ入ゑにはかを奉納すといふ也穢多非人其外都ゐなら町人共參詣することなれは木辻町ゑものなりとて差留はせすにはか藝踊は決ゐならすと急度申付たり與力共方にゐは先例もあるよしにゐ申立る也われいふ先例はあるとも余人は格別我奉行中は決ゐならすと申付たり世々の奉行必市中より俄踊等奉納する事ゑ由也大笑也花を活角力其外のほりゑ奉納位はゆるす也○紀州熊野三山ゑ貸附滯として藤堂家領分ゑものを差帋躰ゑ書面にゐ呼出し藤堂家にゐ六ケ敷いふ故に森下孫兵衞を尋たるに召狀——封り の此ゑ書面にゐ京都ゑ振合にゐ奉行所にゐも聞屆になり居るといふ勿論其旨ならは觸書を出しありされはとて觸書もなき國持領分ゑもの呼出といふこと相當せす殊に寺社奉行所よりは文通とこそ申越たれ召狀とかきては差帋と同し召狀とかきたる折かけの文通あることをきかすといひたれと攝津山城のなとにゐは宮方貸附滯ゑもの共皆宮方にて呼狀を以呼出す振合也といふ也藤堂よりはます〳〵六ケ敷いふ也よつて寺社奉行所ゐ問合ゑ積下書を認たるに其事響て紀州より奉行所ゐ以後は藤堂家ゑものは呼出すまじといひ出たりわか問合と案文をかけははや如此遠國の與力等如斯三山も江戸限ゑ貸附ならはまたよかるへし遠國ゑ弊夥し森下孫兵衞來りて我に向ひはりひぢより錢をとるかたよろし利屈は不申もとより貸附懸りゑ家來なとは武士氣は一向にいらす刀を拔をみれは直に逃る心得也夫故に此度も負申候なとゝいひきこれ不服よりなるへしかゝる男なるに御召御紋なと着用してくる也御家政のほと吾ことき愚眼よりははかりかぬる也新右衞門心得ゑため詳に記也

○廿日　くもりさむし　いなり祭へ遊女共ゑ俄奉納を差留たるにつき聞みれは黃モンハのぬひくるみを着て珠のかさりものをかつきたるもの五十人遊女屋より遊女ゑ内きりう宜を撰ひ三人ッゝきつねのよめになりさ

て鳴物は胡弓に琴を藝子共ひくつもりゝ由よく聞へは內々は組ゝものより誘引て御用祭なとの意味も有之候歟也しかるを差止たるによりていろ〳〵のことをいふ也遠國のこと斯の如し尤先例はあるとの事也いかなる事にやよくそさし留たることゝおもふ也衣類みな損失になるといふ故にわれもはや三年はかりなるへし跡の奉行ゝ時用ひよといひて大に笑ひたり

○廿一日　晴　いなりまつり也○宅狀相屆く母上少々御風邪ゝ由乍去御當分ゝ御事ゝ由恐悅ゝ御事也其外ゝ御無事目出度候○平次郎表御右筆に相成候由目出度候鐘三郎ゝ引移其外新右衞門ゝ家にも不遠とゝ義此上もなきよろこひ也このほと新右衞門に少々にゐもこゝろゆるみあらは可恐のかきり也儉約は不及申事なから其內にも身分ゝつゝしみ第一也易否ゝ卦ゝ彖傳に君子儉德を以難を避といふことあり身分のこと此儉德の意也われら山中ゝ隱居にてさへに此ほと修行中專也まして新右衞門なとわかナミものは百ならては難成也書中に敬ゝ一字一瞬ゝ間もわすれすといふことを聞て少々肩かるし何卒以前より廿段も頭を下けてはい〳〵と申度事也されは共此事勢あるときたれも知ることなからならぬ事也よつて惡人と善人を引出してこれを證す鳥居甲斐守町奉行になりし時こゝにて氣ゆるみ出來てはならすとてつゝしみ方を咄たり其時は少もいつはりとは聞えさりし也新井白石勢ひありしとき人つゝしみ方のことをいひて書を以いましめたり其外菅相公御勢ひの時も三善の清行より危ふみていろ〳〵と申上たり鳥井は僞ともせむ白石はしらぬ男にはあらし白石はいまたしらすとせむ菅相公におゐては聖人也されは共如此人しらさるにあらす行ことかたし勢に引立らるゝこと酒をのみて醉に乘するよりも甚し可恐々々新右衞門なと菅相公にても勢ひあるときは三善清行のいさめあり新右衞門いかに云とも菅相公には不及吾清行には不及といへ共新右衞門には親孫并身上まてまかせきり也新右衞門をおもふこと清行より甚しかるへし

こゝの味をおもひて可恐ことならすやわか恐るゝも又おもひはかり給ふへしよほと人に笑はるゝといふほと懸念をなし人を丁寧にせすしてはならぬ也敬をしはし不忘といへ共敬といふものは箸のあけおろしより一寸のことにも影のかたちに隨ふかことくにて　東照宮の御宮へ參り手あらひ口そゝきて御宮ゟ方へ向ひて一足ふみたるこゝろならては敬を不忘とは申されすこの味よく御勘辨あるへし敬と申候得は一言に候得共朱子學千萬の書物只この一字にとゝまる故に諸先生の說甚多し朱先生晩年の說に敬は畏の字これに近しとあり畏はつゝしみ恐るゝこと也恐るゝこゝろしはしも忘るへからさる也○馬のこと御うらやましわか馬は病馬にてこまる也一眼にはなり老たり乍去別當愛すること子のことし引替ることをいやかる也けさものりみるによくはしる也乍去八十歳位のもの也乘ごとになみた落る也可引替馬もなし當惑のこと也○爲替受取候由不足に候はゝ相廻し可申候差引何程はかり不足に御座候哉○水戸老公齋昭卿わか事を不凡なりとてしは〳〵御意有之候由恐入たる事也彼卿の御事はしばしば我を召れけれともわれ人口をはゝかりて行さりし也彼卿にしられたるは檜山勘右衞門といふ人酒井先生ゟ試合に來り誤にてはしめにわれにいたく取廻され其人藤田虎之介を連來り夫ゟいろ〳〵御懇を蒙りし也○晦日の雷雨なら江戸共に同し不思義なること純陰至極の日に熱雷聲を發す可恐こと也○紀州ゟ御家來金二十五兩を贈たるに返却して其旨奉行ゟ申聞置たるとの事此程と申最よし御三家方故にもらひても不苦をもらはすといふこと甚よし此一條は今般書狀中ゟ大出來也感服々々○左助殿ゟ御事先以安心也これも御骨折なさるへし○鍋しまのこと不思義也○例のねりくらのこと段々膠出來此ほとは至極になり釘のことはさらにもいはす却ゟ申分通に出來る也われよつていふわか世話にゟめつらしき職を覺われをふみ臺にしてわか所藏計はよからぬものに出來て殘念也と申たるに引替可申とて精品に仕立て一くら差出たり以前の品は御もとし可被下候

惣年寄たよりに相廻し候積也此たひのくらは眞底まて半點の論なしといひし也乍去万一不用になり候はゝ鍋島へみせ候樣内匠へみせにやり可被下候以前のくらゟ目かた五十目多しこれは所々に肉つきたる故也織田所藏の品と同し形也夫によりてつくれり○平川町ゟ出火根本幸にしてまぬかれたりしかし散財なるへし○手いたみの事決ゟ容易にすへからす高年に不及して中氣なとになりては大變也父上なと酒を御減一合此ほとよほとよろし酒のこと御心附可被成候肩へこるは大かたは中氣の症也いしやはゝかりて時候あたり疝積痰なとゝ申也筋へかゝるは痟症にても矢張中氣になる也あんまの上手にたのみ背其外の疝積の筋をもみもらひ其外中氣の灸てん痟症の灸てんをおろす筋をもませいたみあらは早く手當あるへし父上なと強ゟ御すゝめ申たれはこそよし左なけれは來春ころは中氣必定の所也目やに出ることなとあるも油斷のならぬ事也父上なと目やに出るによりてわれ考附たり此ほとは目やに半になりたりとて不思義に思召よし

也○弓のあたり至ゟよし大に感服せり○井筒いけたのこと今の世にいふは井けた井筒二ッありて井※紋もかく二ッあれはみたりに名を下したる也井をいつゝとせむには板井筒岩井つゝといふにいたりてこまる也其上につゝといふ稱に決ゟかゝるかたちなしつゝといふものみな□このかたちのもの也又けたと云ものに丸きものなし天圓地方也ノ方をけたとよむにてしるへしけたは角といふ詞なるへし都ゟ日のもとの名つくること理を以いふは少多くかりていふこと也カミといふことなと上かはしめにて神髪まてに用ひハシ端はしめに地のはしと〳〵の間の用をなすものも橋といひ端のところに用あるにて箸といふ類其外蜂巣に似たるより蓮をはちすといひ其葉をはちすばといひ其はなに似たるより槿をはちすといふ類夥しく多しみな道理には叶はぬ也唐人は螢蛾といふことく字を以いふを日本にては二ッなから夏虫といふ類にて日のもとのことは今のことく道理を專にはせぬ也日火緋なと數ふるにいとまあらす其内に又錢セン蟬セニ

センセミ烏梅ウハイウメのことく漢音もあり寺は百濟のことは猿をましらといふは天竺のことはの類三韓唐朝より來るも多かれは一概にはいふへからず○平次郎久世へ禮に行たるに御逢被成たるとの事右は公の別段中の別段なることにて右にゐ新右衞門此ほとの躰をおもふ也可恐こと也さて難有事也

○廿二日　晴　きのふいなり祭木辻町の遊女共三十人余參詣せし也おさといふ立派なるものも多ありしと也其内ふり袖なるもの十人はかりもありしよし也われ常に道中のめしもり幷木辻の類の婦人をみることにおもふことあり道中のめしもりははつか田舍翁のなしみ位木辻町は與力等を以第一の客として借馬の乘廻されてはて革を剝るゝことくにして終る也可憐もの也夫に引替て同しく人の慰ものとなりなから大名の妾と成て末は何院樣と稱せらるゝも多き也これ全其居る所による也されは居所といふものは大切也良禽は木をえらみ良臣は主をえらむといふことをおもふへき事也武士たるもの立場を可撰こと也既に　公儀御目見以上小役人多しといへ共御作事方小普請方御右筆の類對箱牽馬ゑ諸大夫にすゝみしは御普請方より明樂飛彈河村對馬位のことなるへし二人みな御庭番なれは外の例にならす御右筆より肥田豐後なるへしかるに今留役よりは久須美中野我ら其外佐渡ゑ中島の類數ふるにいとまなし御勘定二百六十人と留役十六人引くらへて留役の方多し近來別ゐ也これは追々に刑名のこと下りて留役なとの手にあるによるもの歟それはともかくもいつれにも立場によること也○今朝も馬場にて歩行したり凡二里半ほと歩行せり躰に至ゐよし新右衞門馬に乘てあとにて快よしといふことまことにしかり」わらち二度に一足つゝきるゝ也中間共不審すと也御前は何にて御わらちのいるかといふよし尤なること也未明より歩行はしめ五ツまてかゝり其上奥の馬場故にしらぬ也

○廿三日　晴　木辻町ゑにはかよくこそ差止たり風聞にては客をねたりて衣類其外をみなこしらへもらひたる事ゑ由ならの鄕宿に石川屋助十郎

とて及キヽにてかたき親父あり夫らなと金二兩出したるとの事其旨を女房聞て大なる角にてむなつくしゝ由男と見かけ被頼たれはたて引也といひたるに女郎にたてひきはいらすとてあまりにいかり二兩はいつはり五兩もやりたるなるへしとて大にさわき女房はさとへやられたるとの風聞也かゝることに似たる事いくらもあるへし遊女屋は世直しとて奉行所ゝいなり祭には折々遊女參詣する事ゝ由奉行所へ參れは其當坐は客多しといふよし不思義なるもの也さくら五本奉納したりみなうたあり其内に

狐なくこん春さきて雲とばけ雪ともばける花のさくら木

といふ短尺其外

にきはしくなさしめ給へいなり山神のみめくみねこふうかれ女

なといふもありきいなり祭には奉行は麻上下にて金百疋の御初穂也奥方銀一兩用人三人にて同斷給人は壹匁ッヽ其外郷宿出入ゝ町人共こと〳〵く奉納物あり酒なと三升五升ッヽいくらもあり在方よりも來る也夜四ッ時頃までにきやか也其賽物は同心のものになる也神主來る夫は奉行ゝ百疋のみ也奉行はいつも五兩以上ゝいたみ也よからぬ仕くせ也赤飯も壹石ふかしにしめへいるゝにんしん十把も買ふ也二日はかりは大取込也

○廿四日　晴　日々風ふくさむし○此節吾至ゟこゝろよし○友野先生ゝ跡ゝ詩作其外ゝ直し淺積長齋へたのみたりよつてまつ詩文章一二篇みするつもりなれと霞舟翁と違ひて氣つまり也當年四五月已來つくりたる詩二百はかりありみれはいつれも疵たらけ其上不分其を直し又文章も人にたのまれたる序文其外三四篇やる積ゝ處よくみれはいつれもわろし夫なとを直す也われならへ來りて詩をつくり文章をかくと大字をしるすとは別段に覺たる也人は少も遊はれぬもの也ならへ來りてより歌のしらへ其外みな覺たる也江戸へ歸りてこれを今の十分一にする樣にしたき事也乍去かゝることある故にならのひまも氣くされぬ也

○廿四日　晴　さむし泉水氷る

○廿五日　御用日此ほといろ〳〵の話の序に我苦勞多からむ新右衞門はいか成らむなといろ〳〵いふ故に只今新右衞門方日々出にて金錢も自由何不足なしよつて苦勞第一に多し其内にお千枝苦勞多し其譯は居候二人あり其内女居候なと別ゐ世話やけるなるへし其上にいろ〳〵と考みるに居候か御客さまかの躰なるへしこまりたるもの也何卒お千枝の心配を減し居候は必居候のことくに嚴敷取扱たき事也別ゐ女の居候なとはめしたきの格なるへし太郎なと並々の居候にて十分也只々お千枝の心配少やうにいたし度ものと申たりき敬次郎なとより太郎はわかまゝにて不宜由に付一同御客さまの御取扱とみえたりこまりたるもの也嚴敷して後々のためにしたき事也太郎人まねをなしわる口をきくとか人のいふ也其節は手まねは手へ大成灸をすへ口まねは口のはたをひとくつめることゝ定へし

○廿六日　きのふ並便とゝく○母上の御狀拜見難有殊にめつらしく新のり被下難有候十日はかり前に久須美より返禮（ヘン）にのり五帖來る三帖は一乘院脫カ宮へあけたり今のたよりに母上より賜り村田翁より十帖くれたりなら奉行になりの、りは十分に給ること也柿を獻上すといふになりて柿は少し大笑の事也○岡本近江守ゑ代筆を淺野中書しるして詩作來る文通ゑ内におさとの文と書を板倉伊豫守殊に感して所々へみせて其まゝ臨摸すとていまたとめ置とありおさと大に迷惑したり近江守は朝鮮人唐人迄を驚したる人なるにおさとの文に大に畏れて殊に賞するはおさとの仕合也岡本詩は上手なれと元來和文はあまりにかゝす夫故なるへしわれより詩を贈りたれと一向に沙汰なし勿論何も賞譽なし其筈也岡本は新井白石の詩其外名家の詩を直してなるほとゝいふ樣にする也來山陽吐血の詩は天下へ聞たる詩也夫を山陽にたのまれて直して死後にやりしと近江守われにかたりきされはわか詩なとを何ともいはぬが却ゐまことの事也人はさきの得手の藝へかゝるは大に損也夫を學者へは六ケ敷手帋をやるなとよくこ

丶ろなき人のする事也手かみには必ひらかなるへしわれ一林大内記其外
〻文通みなしかり○けふは春日まつり當場の田樂能にて用人出役する也
酒をそゝきて神おろしをなし振動拜の禮なとあり古風かきりなき事也
○廿七日　くもり　春日〻御祭例〻通十万石の格にて出る也十万石の格
はしらねと中道具共に鑓五本也ちや辨當茶道なとつるゝ也大笑也○なら
の人春日祭は世界第一のもの也とおもひ居る也乍去人の出ること神田祭
の飯田中坂きりの人の四分一なるへし京大坂より万引すりの類來りて盗
する也なら人常にひまなれはみな盗まるゝ也大笑一のこと也
○廿八日　晴　後日〻能也○川上金五之介方〻唐筆十本くれたり追啓に
われ奉行になりて古き金公事を取上る樣になりて公事を買歩行もの多人
難義する風聞ありとあり一向に不分われ奉行になるまては天明以前の公
事を取上たるを京都の例を引移して寛政十年より取上ること丶成たり證
文讓受〻書附も取上ることなるを止たり取拵代人共嚴敷する也しかるに

此風聞いかゝ兼ゐも聞たり其節内々さくりみるに金公事以前よりも多き
は無相違公事をもち出すもの多けれは也これ無余義にいつる也證據ある
を仕舞置は損也といふよし也これは仕かたなし兩なからよき樣にはなら
ぬもの也
○廿九日　くもり　御祭も無滯相濟○われ十五六の時より布衣以上〻役
人に成たし一藝に名あるものに成たしとて金比らへ朝參りなとしたり
父上はわか至ゐ幼年の時〻われをよき人になしたしとて日々塩斷也き
父上の御敎は別段なることにて胎内にあるときより日々書物を御よみ被
成母上なとに三味線の類は御きかせなかりしと也以上のこと母上に今伺
ひて新右衞門なとよめにはなすへしこれはよめ妊身と聞はしるす也さて
布衣以上にも成り諸大夫にもなりたるに御祭なり假初のことなからわれ
一度なり共先箱二人道具にて先徒六人駕脇六人にて歩行へしとはおもは
さりし也人の行末といふものははかられぬもの也われならへ來りしは所

望にはあらねとも此供立にて出ることに父上に一目も一言も御目にも御耳にも達しかぬることゝて輿中にていつも涙をおとす也母上はわか結構を御覽なさるゝのみならす新右衞門の此節までを御覽なさるゝ也御高運かきりなき事也わか口より申すはいかゝなれとわれと新右衞門迄御そばに並ひ居ては十二分過る故に天道滿るをかきてしはしかくなし給ふもしるへからぬ事也よつて母上も只天道を畏れ給ひていろ〳〵のこと思召ましく候新右衞門壹人にても母上位御運の人世に少し

○十二月朔日　曇　月並之禮受ること例のことし○十一月のはしめ久須美より海苔五帖來る其頃の新海苔はめつらしよつて内三帖は一乘院宮へ内々上ケたりけふ聞は其頃御家來江戸より歸りたるもの土產にあけしのりも古のりにて新は至ゑめつらしよつて一乘院宮御母儀に相立居候　先帝の御殿へ其内一帖半を被遣たるよし也いかなる所迄右之のり出しもしらす恐入たること也

○二日　くもり微雪　いせや榮藏のたのみにて春日大明神の五字を神主正三位ちとりに書せたりちとりといふ人書もかゝす文字なき男なれと其書ふり目を眼したりいかにも位あり神孫にて代々神主にて千年來連綿として居る故に氣分公家か大名のことしとみえたりよつて書は心をかくといふことまきれなし氣かあからねは書に風韻雅致は少もなしとしるへしまねては參らさることしるへし書家といふ手習師匠の書いけぬはつ也

○三日　くもり　岡本近江守より

月ならて雲の上まてすみのほる是はいかなるゆえむなるらむ

とよみし油煙齋といふ墨師はいつの頃の人也といふこと問來るしらへみれは當時の古梅園の曾祖父元泰貞文といふもの大墨をつくりて　天子へ奉りし時大坂の鯛屋忠兵衞といふものよみておくりし也狂歌の名は貞柳といひたるよし也世には僞をつとふもの也貞柳は享保十九年八十一歳に

て沒といふまて申來たり

○四日　晴　きのふは六時より五時まて大ゐやい刀をさして甲冑にて歩行したり其みちのり三里壹町余少もくたひれす人はならしによるもの也

○今日わか工夫したる紋附惣まき繪の小サ刀を法隆寺のみねの藥師へ奉納せむとせしにおさと強ゐとむる故に又やめたりよつておもふわか一族のうち若き人のうちを見立て歸らは讓るへし右之小サ刀は芙蓉之間の役人着坐の節さす小サ刀也新右衞門なとへ今ゆすりては當り前のことにて必入用なるへけれはおもしろからす今は普請位の人之内より鑒定してゆすりたきもの也我おもふ旨ありてこゝろをこめしものはならの寺へ奉納せむとおもひ切しか又おもひかへて返りて後のことゝせり○昨夜夜四ッ時頃道中六日切之書狀相屆くにとか申候よしの女之義に付御深切可申樣も無之御狀參る右は別記にて御返事上る先以御一同樣之御無事目出度奉存候○アンラカ相屆候由承知右は御申越之近來之絶妙のつきほに候はゝ必出來可申なら等へつきゝもおもしろく候乍去藥効は少も有之間敷候本草によれは至ゐ甘美なるものゝよししかるに一口もくはれ不申候ヨクイニンを日本へ植候得はみな珠數玉に相成申候一向に役に相立不申候アンアカも既に性を變し候上はもとより藥効無之段必に御座候龍眼肉のこと尤珍談右はかたちはかりに候哉味もよろしく候哉かたちはかりにゐは白き西瓜箔置之木刀と同事に可有之候橘なと所々有之候得共實物は日本に大和の春日社外に一ケ所有之候計と申候眞淵の說有之候○寒氣もつよく相成候由ならも三日には少々雪けしき氷はりつめ申候三十六度の寒に御座候○岡崎にて之御取扱驚入候みなこわき事に御座候別段之義を承候たびことに至ゐおそれ候○なくらにて御手いたみ御本復之由何より之大悅乍去尙御心附可被成候畢竟筋へこり候毒有之候故と奉存候芍藥甘草附子湯至極に御座候百日も御用ひあるへく候下手醫者の人をあやまること多し可恐事也右に付調役之御考尤よろし○高野山學侶行人灌頂の爭ひ十八年

相懸り一席にて内濟双方ゟ喜ひ右はマクレ寺なから藥効に御座候○御結納横山家ゟ被遣候由目出度候みな　公儀ゟ御恩也乍去新右衞門ゟ出精よりも有之候　公義の御恩は月也御恩を受る人は露也水也出精次第にては海の水池の水大河の水さゝのは末の露とかはり候得共月に私は無之候受候人の大小により申候大なるほと御恩も多く御座候別ゐ御奉公大切に御つとめ可被成候○十一月十七日出ゟ日記相屆候由刀ゟ義さめゟ義御丁寧に御申越却ゐいたみ入候○前ゟくすりの木に付論有之候新右衞門ゟなくらの論と同しいかによくみえて正宗のことき刀と刀莖及模様少もかはらすしても少も切レ不申候ゐは書かける唐からしと同しことにて夫をよき刀也とたのみ候はゝ大變出來可申候役人も又しかり少もことをせす見場はかりよろしく候ゐも其任の出來不申たとへは留役ゟ吟味の是非重キ人ならは人物を撰ふなといふこと人まかせにて是又アンラクハにて却ゐ藥のある丈大害をなし申候下劑其外メンケンすれは人早く其毒を知候故用ひ不申候得共似て非なるものを用ひさして其時は害なきかことくにても其つもり〳〵上下相欺目出度きの恐悦の穩のとて申つくしたるはてはて

は其毒の打て出たるときは藥のいたし方は無之ものに御座候附子大黄は人恐れ候故毒急にしてあさしアンクラハの類は効なくしておのつから毒となり人をしらす〳〵して害すること多き也毒藥も死せさるときは死一等をなためらるれと似せ藥は一寸にても死に處せらるゝことにてしかるをなみ〳〵の人はにせ藥のさし當り害なきことにのみ目のつきてゆるす故に名目重く相聞候得共事實に寄罪科別段なることのケ條を出して寛保ゟ律に御敎ありし也大岡越前なと享保より寶暦已前まてゟ人は眞の眼ありしとみえし也右ゟこゝろにて唐ゟ歴史をよめは隱し樣はなき也乍去事をせすして自愛は中醫にまさるといふことき所もありこれは曹參か蕭何の跡を引受て漢の天下を治しといふ類也乍去いつれにいたしゐも人材其人ならぬことにてはきれぬ刀似せ藥の類也新右衞門なと追々ことをする

人なるへけれは心得のためしるす也

○五日　晴　少々暖氣也ならへ來り四年のうち硯氷りしこと一度もなし池の氷けふとけすかさねて氷ることなし朝はりて夕かたはみなとくるなり夏あつき故たけのことはあり○新右衞門の日記をみるに朝寐られぬとみえたり追々しかなるにはこまる也夜四ッ半迄必書をよみて朝は七ッ半時也三時いぬるを大悅とする也これにはこまりたるもの也○今朝馬にのる別當のかほをみておもひ出たり別當のかゝ又子をうみたり月たらすにて無間もわるくなりたり齒貳本生居たると也別當かゝの所爲にしてかゝを打擲し大酒して嚴敷しかられたり出產に付金貳朱遣したるにもち歸り大にかゝを叱り汝か子をこしらへたれはこそ上にてもかく御厄介か出來たりとて又頭を打たるよしみな〳〵わらひことにする也生なからに齒のある人いくらも多し日のもとの　天下の御うちにもあらせられしかと覺たりめて度ともいふへき位のことも也

○六日　晴　重きものをもちなるれは輕くなり日々歩行すれはくたひれすこゝろの修行もかくありたしこれも乞人は乞人なるゝ類なれと夫にあらす聖賢の位地は大造のことなれと兼ゑ難義ならぬうちなれてこゝろをたのしみたきこと也この頃工夫をする也歷史をよみていにしへの人のことをみてわか身と引くらへみるかよきに似たり其度にたのしみを求出すかことし

○七日　くもり　來年は新右衞門よめ出產あるへしとゑ事なれはいいとめて度新右衞門に似候へと新右衞門か生し時のことをおもひ出るまゝ記す其余は母上に御伺候へ新右衞門か生れしはわか七歳の十一月也いとさむき曉と覺たりわれは御祖母の御ふところにありて曉めさめしにねゝ（目兒）さむか生たり靜せよと仰られたり其余の詳なることは追々聞て覺たり其頃は　行道院樣所々の對客登　城前に供壹人を被召連たれは女なし伊助といふあから顏にて眼つきおそろしきか壹人居たり母上は御祖母君のこ

とより朝夕の釜もと洗濯共に万事御引受也その伊助は御ともに出るはかり折々恩きせ貝に水をくむはかり也既に朝霜のつよくみちあしきか岩ほのことくに氷たる所にて母上手桶を御もちなから御ころひ被成たり御いたましきことに覺て其頃の御顔は我今にいたりたしかに覺居る也いかにも此御くるしみをはまぬかれ樣いたし上度ものとおもひし一條は紛なし其節のこと母上へ御伺なされて知るへし御妊身故に水くむとき用心せよと仰られて御祖母きみの御いたはりありしことも幼こゝろにうれしかりしを夢のことくに覺居りかゝるわけなるに夜になりて西國の人來りたりこれ乙津村の後藤彌四郎也「このもの今にわか方ゐも來る也」其時母上は少々虫氣附にて被爲入たるよし夫はわれしらす俄に食事といふことなりしよし下女といふものはなし母上の何事もなさるゝに右之さわき故に蕎麥をとりて給さすつもりになりて其ことをいひしに田舍ものゝ質朴なれは蕎麥はきらひなりと申たりよつて母上のいさゝか虫のかふるを御脈へな

此伊助新右衛門は常にかわひかりて人々愛する子也といひては高慢せしことなとありき

此彌四郎整日まて死せるなかことくにたりて居りいなかた人也とて大祖母御母上御笑なりし也

されなからめし拵をして給させ給へり其ときのことはつかにところ〳〵覺居る也われは御祖母君と臥して前に記せしさま也今を以おもへはさむさのつよきたえかねしことを覺居るはかりなれといろ〳〵とおもひめくらすに御兩親の御苦勞はけしからぬことなるへし右之わけ故に母上は日からも御立なされぬうちに新右衛門かをしめの洗濯を遊はしたり寒中其上にいまた御肥立なき故かみる〳〵御手其外へむくみ來りたることは覺居たり其後雇女はなされす夫か御祖母君の御手傳あしかとうろ〳〵覺れと今はしらす是も母上に御伺あるへしこのときの御ことを新右衛門らか子々孫々へも傳へ第一新右衛門落涙感佩しておもひ奉りて其こととのこゝろを忘れす子孫の貧窮になること決ゐなしわれもまた同しこと也かく御苦勞にてありしか御祖母君へはわか店のうち田と云酒店へ行かもの立うりをかひて上られたり常のことなりしやしらすわれ母上と錢湯へ行て歸りに母上の御手傳に竹の革つゝみをもちたることをいさゝ覺居る也乍

新右衛門よく母上につかへ奉ること中々なかの不孝なる類しこれはよめらにもも太郎らへもしめたしらしるすも也

去其時にてもわれ等か手習かみは必白帋也き其白帋いつくゞか出けむ今おもへはみな母上の御あふら御涙の集りなるへし恐入たること也前にいふこと少も疑しきはかゝぬ故に足らぬ所は母上に伺ひて新右衞門家の万世のかゝみになし給ふへしよつて記す也右之困窮にて鴉なとを差上られしといふこと別に藝の費を少も御いとひなかりしことなとは別而しるへきこと也父上御酒被召上ことはわれ十九才の頃より也御下戸とおもひ居し也いかなるときにか有けむはつかの酒なるへし銅のちろりへ入て少々被召上ことありき其時新右衞門二ッか三ッはかりてチロリを覆（コボシ）し夫限になりしことありき其節の余事是にておもふへし与風新右衞門家万々世の基をしるしかけてこゝにいたりてしるすこと不能故に筆をとゝめぬこれらのことは内藤川路井上のものは日々三復して万世の修行とすへき事也

この御記の一くたりよむにたに身にしみたゝ泪こほれてとゝめあへす實にうからやからに行末よき御をしへくさいとありかたきことになむおほえてよめる

子らか末立さかえよとたらちねか其身をつくしいともかしこき

霜雪のうきめしのきて春にあふ今の操のしるきはゝ木ゝ

末遠くかゝるをしへを子ら孫ら家の風にも吹つたへてよ

高子

○八日　晴　昨夜微雪當年はしめて也○けふ惣年寄へ一荷いろ〳〵と取集て渡おさとみなしらへ也○永井能登守御先手被仰付候由この人久須美の別段の人撰也

○九日　微雪　おさと歩行して身をこなせと醫師段々といふ故に其ことをはしめたりけさは雪はれてけしきよけれはわれもおさとゝ共に庭を歩行たりかすか山のけしき絶景也くも半かゝりて村ら〳〵と雪のふりたる書のことし泉水のふちを一廻り廻れは一町半ある也

○十日　晴　夜あられふる今朝二十九度のさむさ也泉水厚氷にて半夜のあられ玉盤上珠をちらせるかことし當年隨一のさむさ也乍去すゝりに氷

なしこれ江戸より暖氣なる故なるへし池の氷もひる後はみなとくる也○
中野石見守大坂町奉行被仰付候旨申來る
○十一日　晴　くすりにもとくにもならぬ烟草とちやはむきのよきかよくうれるなりといふうたあり油烟齋なとかよみしなるへし○周公の方の美ありともおこりかつやふさかなれは其余はみるにたらぬといふこと論語にあり吾夫によりて周公の方の美なくともおこうらすしてやふさかならすはみるにたる人なるへし役人のこゝろこゝにありよくつとむへきこと也
○十二日　雨過暖也　順作法華寺御所より御頼にて御同所ゟ御居間其外ゟ御繪をしたゝめたり繪はから子遊ひにて極彩色也よほとの工手間もの也惣金にてきぬ地也江戸ならはいつれ五六兩以上ゟ畫料なるへししかるに金三百疋に畫料として紫のラセ板羽織地被下たり紫故に羽織にならす奈良いつ方にゟ買候哉と取替候積にて内々用達に聞しに法華寺御所は近衛殿ゟ御息女御入室ゟ積にて此ほと御普請ありし也よつて何もかも近衛殿御差圖也右に付畫謝禮ゟ義近衛殿ゟ内々伺たるに思召にて奉行ゟ家來ならは衣類其外に不足あるまし風流人なれはヒフなとに紫よかるへしと近衛殿いろ〳〵御世話有しといふことを聞出し無勿躰事也何色にてもよろしとて取替ことをやめに仕たり
○十三日　晴　至ゟ暖氣也すゝ拂例ゟ通也○なら町人何そ身の守に成わかりやすきこと記してと望こひけれは正德の高札の意わするへからすと記し遺したりしかるに其もの又々願ひけれは韻語にて文章をしるし遺したり其意は商人は四民のうちにて最卑きものなれは其卑きを忘るへからすさて又商人の家といふものは錢あれは昌(サカ)へ錢なけれは亡ふるもの也されは錢を以性命とせりよつて錢を以教を示さむ錢は周禮に泉とあり泉のことくなるもの也よつて高きことをきらふ也故に飲食必卑くし居所必卑くし夫より人に應對より諸色の直段其外共に都ゟ卑くすれは其卑きを錢

このみてみなあつまることたとへは泉の山より出て日々に卑きに流れて海にいたることく其家に泉のことくに錢あつまるへしといふことを記し遣したり○すゝ拂に付おもふは友野先生のかたへ煤拂にやとはれて必行て先生と高柳へ行し銕次郎幷源兵衛夫婦先生の妻なと塵にてつくりたることになり我も二百文の日傭かはりに椽頰其外共にふき掃除等をなして夕かたは大に草臥たり夫は三十四五年前後のこと也しかるに先生の兩親源兵衛夫婦先生幷銕次郎とも泉下の客となりてのこるもの我と先生の妻はかり也可歎こと也夫に付おさとゝおもふはある人金子多くありて御役中に土藏に藏し置しも多かりしと也其人死して盗賊にとられたりさても苦勞なること也われ今旅行たけの貯あり其上には金子の望もなし此上百年〻壽のうちにたゝ心にはつることなくしてよを穩正にすくすへしとおもひ定たり人に藏(カク)し心配をして金をため晝夜番をして人にとられ瓦石と同しきことならすやまたも盗賊にとられたれはよし子孫に奢をさせ遊女にとられ酒食に遣ひ子孫をして災に逢しめるいかなることにや我こゝにこのほと工夫よく附たり夫故に刀脇差も一わたり武士役まて也武具馬具またしかり諸物に一向に望絶たり夫に付いまた望あるは一尺六七寸のよき脇差壹本を買てクサリナハの刀と大小にしたきおもひはまたあり其外は世のこと今かくしたきといふことなしこのこと新右衛門なとのこゝろ得になるへけれはしるす也子孫によからぬもの出來れはたからを贈りても三年のうちには貧人となる也子孫に人あれは金錢なくても金錢に患ひなし佐々木脩助井上新右衛門みな至極の貧人也今を以おもふへし生駒善右衛門一万三千兩を只もらひし人也老後夜着なくてありしをわれ新右衛門もまのあたりみしこと也世上のことかゝることなるに不筋のつとめをなし不筋〻心配をなして人の氣をとりて其あと前のことしよくおもへは可笑のかきり也○いにしへ謝顯道か明道か獵を好まれしかおもひ絶てやめられ其念慮絶しといはれたるを聞て夫はみたりにいふ也なか〳〵こゝ

ろといふものかくはなりかたしよくつゝしみ候へと云しにのち獵より歸るをみて忽に其氣起りしと云こと近思錄にみえたりわれかく刀劔其外の念慮をたちしに今以前のことしこのめることにかつこといと〳〵かたしおそるへきこと也刀劔は小事也其外のうち官位又は名と利とのこといかゝあるへきこのほとかくなれと又々破るゝことありてはならぬ也なら奉行所は刀劔をみたくてもなし官位名利のこと少く桃源に世を避し人のことくなれは却ゐ心の修行少々出來るなるへし世の中ことかくの如しとおもへ定ても江戸へ歸りたきことは少も減せすこれも天にまかすることはよくしれりされと少もおもはぬといふにいたりては却ゐ禽獸なるへし

○十四日　晴　今朝馬場を甲冑にて歩行二里はかり也甲冑皆具にては二里はかりにて大につかるゝ也尤大刀大脇差をさし其上に十篇之内二度つゝは急奔する故もあるへし三貫目の具足にてはかくの如し五貫目前後の具足にては歩行一里の人江戸の士にはあるへからす本多中書なと三貫目の具足也こゝろあることなるへしいかによき甲冑にても着用して一里も歩行漸にては捨もの也

○十五日　晴　月並之禮受ること例の如し○きのふ中野へ反物を遣す其追啓へ出まかせに

難波江のよしをかさねて早歸り虎の御門の跡を追らし

としるしやりたり狂歌と本歌と半分宛も大笑也池に氷なく庭にとりなきてはるのことし

○十六日　くもり　至ゐさむし三十八度也乍去氷なし不思義故泉水端へ器を出しためしみるに三十七度半也常に坐敷と庭五度を違へりけふは坐敷のさむき日とみえたりよつて馬場にて馬をのりたり老馬足少々いたみ片眼なりたれとこのほとさむけれはよくあるく也可惜馬也のるごとに落涙する也

○十七日　晴　けふは　東照宮の御忌日なれは例之通七日の潔齋中に付

朝六時より甲冑にて馬場ゟ行五ツ時までに三里二十町に近く歩行せり三里二十町といふは馬場の往返三百六十七歩たつみのいなり社の坂上り下り二百歩あり夫を二十往來したり馬場は五十往返したりさして草臥たることなししかるにはいたての麻上品を用ひたれとコハバシナナクなり居る故にもめたるところすれ合てその所すりきれたり今の甲冑師の造りたるならは必わるくなるへき也孫子軍爭篇によれは敵陣と味方の間三里は必あること也其みちを馬にのりて行とも今の世はみな馬より下りて鑓合奔走すること必三里はあるへき也よつて三里ッゝは歩行する積也月に三四度は近頃必かくすること也甲冑惣目かた三貫目位にて二尺三寸に壹尺三寸の脇差をさし三里歩行し馬にて五里往來せねは武士の役はたゝすとしるへし前の三里といふは孫子にある三十里は日本みち三里なりとあり後漢順帝紀に李固か上書に軍行三十里を程とすとみえ司馬仲達か公孫淵を討しにかたみち百日つもりにて三千六百里とあり日本の三里余なるへしいにしへは馬專らなれは足輕の兵まて馬にのせしこと太平記にみゆ天正の頃よりみなかちたちなりたりこれ一變也

○十八日　晴　いづゝのこと前に二ケ所に論せり伊勢物語古意二十六枚につゝ井筒ゐつゝにかけしまろかたけ」の歌を眞淵解ていふはつゝ井は一ッの井の形也井筒はそれか上に落もらせじの料に卽其井の形に構ふる故に井筒と云されはつゝゐつゝとうたによみしは筒井の井筒を略して筒井筒といへりとあり又同し所に井に名多し筒井は筒のことくに丸にほりたるを云板井は板もて四方にかまへたるをいへり今俗に井つゝといふは是か上の形也とあり

井けた井つゝ前と合みるへし

○十九日　くもり折々雪　昨夜夢に新右衞門入來ゑ由おさと申に付驚て欠出したるに帶なし手拭を帶にて參りたるに新右衞門たのしからさる躰にて母上と一諸に臥り居起出て吾に逢たりよほと年よりたる躰也われいふ新右衞門御用多にていろ〳〵心配ゑ由兼ゐしる所也けにもとおもふ也

としふけたりさて用はいかにといひたるによほと六ケ敷事也とていろいろ考たる躰也さらはいかにと再ひとひ返さむとせしに夢さめてはや六時なりけれは起出て其旨おさとにはなし世の中に夢幻泡と佛書にもいひて取ところなきものにいひぬさてまた血筋の者のいろ〳〵の事に逢たるに其以前少も夢にかはりたることなし其外身分に付是は大事とおもふ夢をみて満身汗をかきたるに其後少も子細なきこと也よつて夢の少も役にたゝぬは分明にしる也されとかゝる夢をみしとおさとに語りきしかるに夜に入宅狀來る心に分明にしりなからも先平安の字よりよみて半分は安心しなからよみたる也しかるに別條なし其上に母上の御機嫌よきとの事第一の悦ひ其外も無事別事なし大安心也夢の事莊子に聖人夢なしといふことをしるしたるよりいろ〳〵といへと周禮に夢を卜することあれは夢のしれぬこと明也しかるを僞のこと書物にある故に人々迷ふ也乍去たしかに我心は定り居なれと新右衞門の事を朝夕にいろ〳〵と案しおもふこと

わか身に過たりわか身に過てはいかゝなれと第一に母上第二に孫第三に狂女第四に身上かくもまかせかたきことをまかせ切にする故にて其上わか身の上にことありても以上之患なし新右衞門に間違あれは以上みな間違ふ也故に新右衞門を思ふこと我に過たることの實なるを思ひて夫を主にて日記をみるへきこと也○狂女緣談のこと風聞のこと露疑なしさもあるへしこれにかきらす緣談事の風聞親類緣者といへともあてにならぬ也それはいろ〳〵と身に覺あること也新右衞門の世話にて事實相分りて狂女一ッの運を得たり其世話したる人のこゝろ此一事にかきからす万事につけておもふへきこと也アヽ此末いかゝあるへきこれ故にわれ常にこの外に案しおもふ也○鍋島のこと驚入候さもあるへし乍去我らかよきこゝろ得になること也○おふさ緣談之事に付根本之相談書一覽候處存寄これなく候いろ〳〵のことあれとみな夫は人の口也乍去肝煎に成直に世話取扱になりしよしは僞あらしさらは世話取扱といふものは惡黨にては

出來不申候並の人のかたき男のなる役なれは人物もいかゝにもあらしい
かゝにもあらしとおもへは高も二百俵なれは其上に存寄これなく候早々
御取極可被下候これおさとにも申聞たるに同意也○敬次郎事はいつれと
も新右衞門と善左衞門との御相談之上可然方に御決し可被下候さて又な
ら表へ御遣し被下候てもよろし夫は送り參り候人にも寄可申候左候はゝ
太郎一同御越候ゟもよろしく候敬次郎參り候序太郎參り可然候乍去右等
之義は遠方よりの考にては參り不申候間可然御取計可被下候○入用之書
付詳に御申越候ゟ添候夫にて凡之義も相分り候新右衞門へ身上まかせ切
にいたし候上にいろと申遣し候もいかゝに候へとも元來くり出しわかり
兼候間申遣し候事に候其上は追々申遣し候爲替金にて御承知可被下候○
狂女之事に付新右衞門段々之御存慮御尤と申は申迄も無之義御深切之か
きりおさと一段感歎これに過不申候くれ〳〵も左衞門尉におゐては少も
ゆるしかね候やつに御座候乍去兩御養父母幷おさと別ゟいろ〳〵と申候

喜にことし
のふみも敢
なむあとの
喜ひはるに
しるさむ

ゟ嘆息候○新右衞門平日行跡之義詳に御申越候ゟ左衞門尉は中々及ひ不
申候義と今般之書狀に別ゟ驚入候ゟ感心之至に御座候御申越通に候はゝ
少も存意無之候去なから奈良奉行と違ひ候ゟ所々にて目を附候義に付い
つれにも方正嚴勵之義御守り可被成候守り候上に別に可申進義は無之候
新右衞門之愼左衞門尉之第一之喜に御座候
○廿日　はれ　昨日の微雪にて今朝ことにさむし
○廿一日　晴さむし　めつらしく氷の上へ石を投てすら〳〵と行ことく
に成れり伴金左衞門より古物之義に付申來る品も有之に付右之返書いた
し候に付与風考候處周易の法終を尋てはしめをしるといふによりて日本
書物ありてより　應神天皇より御末　仁賢天皇の御代まて日本書紀によ
りてしらへみるに御十代にて二百廿七年也よりて　神功皇后より　神武
天皇まて御十五代をしらへみるに日本書紀之通にて九百廿年也しかるに
御十五代ゟ二百廿七年之割を以しらへみれは三百四十年となる也三百四

十年　應神天皇の前は前漢の末にあたる也しかるに周惠王より割てある故に九百廿三となる也ならし六十年ッヽに當る也勿論いにしへの人年みな長壽なれと御親百年の御壽にて御子廿歳の時御誕生なれは御子百歳まての御壽ありても御代は二十年ならては無之候に付先ッは一代二十年つもり位之もの也

○廿二日　くもり　かくまて寒けれと夜はいさゝか暖也とみえてさしてさむからすおさとなと足のひゆることなしといふ也我なとは猶更也お千枝にカシハメントリの足の黄なるを給さすへし至而養ひになる也染なと近頃弱なりて夫を給大に効を得たりといふ也おさとにも給さする也よほと効ありと云

○廿三日　晴　あたゝか也泉水の氷全にとけし也○けふは與力同心共之内にして學問所鎗劔術出席多之人々へいろのもの遣ス

○廿四日　晴暖氣也　乍去少々氷あり

○廿五日　晴　此ほと御用追々相濟寂寞也去年已來出金にて當年追々貧人老人を救ひみせたるにならのもの喜しとみえて當くれも一〻目前後數十人出金せり

○廿六日　くもり　御役所小遣ひ御役所欠所之ものを盗而今日死罪に相成御役所昔より盗賊なし與力宅共雨戸を建るといふことなし右故御土藏たりとも〻りなし夫故にいろ〳〵のものを今般被盗たり十四より御役所之小遣ひに成當年四年也憎きやつ也

○廿七日　過暖强雨　ならに町人の内墨や小右衞門とて富るものあり其もの醫師を以町人の守となるへきことを可成は長壹丈はかりに記してよといひぬ立派なる帛を越したりよりて斯そしるし遣しぬ寧樂に男の子あまたもたる人其子らに行末なかく敎ふることを假名もて目やすからむ樣にしるしてよと望ごひぬよりてつら〳〵おもふにいにしへより文のまき〳〵に敎を述ること多かれとみなよく身を修といふにこもれることにて

其身を修といふはいかなることそといへはよく身を全することゝおもふへしさて身を全するに第一にしるへきは　公のおきて也其おきてのうちにもわけてしるへきは市町に掲て人にしらしめ給へる正德の定ふみにこそあれ其定ふみに親子兄弟夫婦をはしめ諸親類にしたしく下人等にいたるまてこれをあはれむへし家業を專にし懈ことなく万事其分限にすくへからさることゝあり夫を能守るへきことそ人のいふをきけは此文望乞男常に子らに敎ふるに公の御めくみを忘るな親によくつかへよ茶の湯なとの遊ひ藝を專になせそといふよしこれよき敎にておのつから定めふみの趣に同し故に定ふみをまもれは則親の敎にたかはぬ也万事分限に過へからすとあれはつゝしみて諸事儉約すへしきはもとよりのことそかしされはよく守ときは孝行はさら也諸親類まても睦敷家いとやすらかに治りて分限に過さぬのみならす家業を怠らねは招かすして正しく寶集りて多くの子らか家〳〵行末ひさに富さかゆへしこの事の廣まりてなら人のみなかくもあれかしと喜ひて記しぬ喜永二とせの冬寧樂のことつかさとる翁しるす

○廿八日　晴　歳暮之禮受ること例の如し○與力同心共骨折たるにより御褒美之金之出方なしよりて昔は奉行與力同心に薪をたりし六方山といふ薪山はけ山になりて捨りたるを寶暦のころより捨置たるかよき山と成たれは其山内にて根廻り五寸までの小木をきりて與力同心へ被下積伺之通御差圖濟たり右之金六〆二百目に成夫々わか見込にて出精之高下により割渡之義申上たるに江戸より見込之通可取計旨之御差圖濟也夫を夫々に割渡したり奈良奉行はしまりてかゝる御褒美は今般はしめて也とていと〳〵みな難有たり

○廿九日　晴　今日落著もの至而多し右に付左之通に成○豪家のものなるよし懸物にするとてたのみたれはかゝる文章をしるしてやりたり

商賈之家。有錢昌。無錢亡。錢者商賈之性命也。錢。周禮曰泉。今暫示以泉焉泉之

爲物。生山中至卑之寰。不選分寸。唯卑是奔。涓々綿々。成川成淵。終極其根。海者天下之至卑也。故涓滴川淵。輻湊來。錢亦如斯矣。汝置身於至卑。衣服必卑。居所必卑。應接必卑。收利必卑。朝夕孳々。如水之求卑。天下之錢集。汝家共海無盡矣。

汝夫勉諸。

○卅日　晴　當年與力共出精にて御用辨殊によろし小民を救ふ意ならのもの辨て追々出金をいたす與力同心之御褒美にて與力ゟ内二番目羽田鎌左衞門ゟは銀七枚幷別段三枚右ゟ順にて筆下にゟも出精いたすものゟは銀五枚別段金五百疋遣す同心の十七歳位ゟもの無足のもの迄銀貳枚に成同心ゟ別段出精ゟもの二人は廉々にて銀六枚に成なら奉行所大盃一件之節御褒美ありし外夫等ゟことなしよつて組中大騒きにてよろこひ候ことは大かたならぬ也これも　公儀御恩の故也當年公事目安高千三百十五内千三百相濟十五口戌年ゟ殘みな金公事にゟ對談行屆未決ゟもの二口也いつれも十二月吟味取懸也入牢いたし候盗賊博奕打三百五十二人三百四拾人出牢落着にゟ殘候もの十二人内十二月十八日召捕候もの一人殘十一人は廿日過召捕候もの共也かくの如くなる故に與力同心ゟ御褒美も無余義也

乍去盗賊は百五十口訴有去年より廿口多し是は米高故なるへし來年は減すへし乍去以前に見合すれは半に減たり

くれて行としにもしのふ垂乳根よかはらて千世のはる返ませ

もゝひらにあまるこ金をわかちやりてこゝろたのしきとしのくれかな

難波江のよしあしもなく暮て行としをはよしといはさらめやは

はるはとく立歸りしもあら玉のとしのはしめのあすそ待るゝ

天工急促白駒鞭。過隙頻驚七々季。三百俘囚判幾盡。一千訟獄斷全獨。

賜書最喜慈親健。舞劒猶誇頑叟堅。歳暮山衙愈閑散。微燻興釀得初圓。

清閑無吉也無凶。高臥過季任性慵。臘月春來餘八日。暖雲雨暴怪三冬。

紙窓補敗童頻困。柏酒豫具婦劇重。自笑家翁徒縱逸。步庭獨愛後凋松。

復亦今季何事成。徒驚白雪壓頭盈。忽過三百六旬日。留得纔殘鐘一聲。

川路聖謨文書第五

非賣品

昭和九年一月二十日印刷
昭和九年一月廿五日發行

編輯代表者　東京市本郷區駒込東片町三十番地　藤井甚太郎
東京市四谷區新堀江町三番地
日本史籍協會代表者

發行者　東京市四谷區新堀江町三番地　早川良吉

印刷者　東京市京橋區湊町三丁目八番地一　高橋赤次郎

發行所　東京市四谷區新堀江町三番地　日本史籍協會
電話四谷三二八七番
振替東京三九四五番

不許複製

終